IS―涙なくして瞳輝かず―

三三三 三雲

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

織斑一夏発見から僅か一月。発見された二人目の男子はイギリス代表候補生セシリア・オルコットの身内だった。

本作は処女作です。

「ＩＳって後方支援型は居るけどＩＳの支援をする専用のＩＳってあんまり見ないよね～」的な緩い発想から産まれたものです。

目次

一話「二人目の噂」 1
二話「転校生はセカンド男子」 4
三話「オルコット家との過去」 7
四話「個性的な転校生組」 10
五話「クラス対抗戦開幕」 13
六話「クラス対抗戦早期閉幕」 15
七話「酷薄な現状と告白のチャーハン」 18
幕間「彼ら彼女らの休日」 21
八話「二人の刺客と三人目」 25
九話「サード・男子・インパクト」 27
十話「再興し、来校し、邂逅す」 31
十一話「孤高の一人と不運な二人」 34
十二話「サンド・ウィッチ」 36
十三話「波乱の予感」 39
十四話「ファーストコンタクト、カミングアウト」 43
十五話「決別」 45
十六話「平穏」 48
十七話「噂話と憂さ晴らし」 51
十八話「私闘（死闘）」 54
十九話「それぞれの受難」 60
二十話「嵐の前夜」 64
二十一話「学年別タッグマッチ」 66
二十二話「ツーマンセル」 69
二十三話「エメラルド・ピュープル」 71

二十四話「スタンドプレーｖｓチームワーク」――――73
二十五話「強者と器用者」――――76
二十六話「二度目の秀撃」――――80
二十七話「不意打ちは鋭く」――――82
二十八話「幸運の反動」――――87

一話「二人目の噂」

その日、ＩＳ学園、いや、全世界に激震が走った。

「…はぁ、やっぱり上手くいかねぇなぁ…」

愚痴を零しながら歩く少年。今や本人の意思とは関係なく世界中に名を、顔を、性格を知られることとなったビッグネーム。

織斑一夏その人である。

一週間前のクラス代表決定戦。イギリスの代表候補生セシリア・オルコットとの模擬戦闘においてファースト・シフトを遂げた彼専用のＩＳ「白式」の展開及び武装訓練を終えた帰り道であった。

「大体なんだよ、『手の中に剣が現れるイメージ』って…」

ＩＳ〈インフィニット・ストラトス〉の展開には想像力と僅かに才能が必要になる。ここでいう後者、才能とは、言わば適正ランクのことである。この時点での一夏の適正ランクはＢ。そこに問題はなかった。

つまり問題なのは前者、想像力。イメージする力である。

登校初日に再配布された分厚い参考書には『手の中に剣が現れるイメージ』と書いてあった。故に大真面目に『手の中に剣が現れるイメージ』をし続けているのだが中々上手くは行かない。この前の最高記録である3秒掛けての雪片弐型展開には心踊らせたが箒には懐疑的な視線を、セシリアには微妙な微笑みを、織斑先生には出席簿アタックを頂戴した。解せぬ。

…余談だが、その参考書のイメージはかなり理屈的というか捻りのないものである。万人受けするように作られているのかもしれないが特に『自分の前方に角錐を展開させるイメージ』（急上昇、急下降）は意味不明である。

そんなことをつらつらと考えながら寮に帰宅。部屋には同室で幼馴染の篠ノ之箒が居るはずだ。最初こそ心身ともに成長した幼馴染みとの相部屋には困惑したが、2週間経った今となっては入室くらいは手馴れたものである。相手が着替え中の可能性を見越してノック。

返事が無いのでシャワー中か。先に食堂にでも行こうかな。などと軽く考え、足をそちらに向ける。
　食堂にはテレビが設置してある。そう、食堂にはテレビが設置してあるのである。何故二回言ったかというと、そのテレビには大量の人だかりが出来ており、外からは見えないからだ。理由は気になるが流石に同年代女子が群がる空間へ突撃していく勇気を一夏は持ち合わせてなどいない。故に、遠くからその様子を眺めるのみ。
「うっそ！二人目の男子…!?」
「二人目の男子だって！」
「うちに来るのかなぁ!?来るのよねぇ!?」
「二ツ目の男子…？」
　などと聞こえる。最後はともかく、そうかぁ二人目の男子かぁ。と注文したうどんを啜りながらふわふわと考える。暖かい鰹出汁が疲れた体に染み渡るなぁ。
　…ん？うちに来る？二人目？男子？…いやまさかな。
　因みに帰宅しても箒は居なかった。これ幸いとばかりに手早くシャワーを済ませ、明日も頑張らなければ…と一人意気込んで就寝するのだった。

　セシリア・オルコットはそのニュースを見た時、それはもう露骨に狼狽していた。具体的に言うと食堂に入ってきた愛しの一夏に気付かないほどに。（まあ周りもほとんどが気付いていなかったが…。）
「む、どうした。そんなに驚くことか…？いや、まあ確かに一夏以外にＩＳを動かせる男子が見つかったというのは驚きだが…」
「い、いえ…なんといいますか。その…」
　流石に訝しんだ箒が声をかける。かけられたセシリアの方はというと何かを悩むような、しかし決意した面持ちで
「彼…身内でして。」

　その日ＩＳ学園に二度目の激震が走った。

セシリア・オルコットはイギリスの名家オルコット家の現当主である。彼女の母は幾つもの会社を経営する敏腕実業家であったが、三年前のとある事故で父とともに他界した。その座を継ぐため、偉大な母の名と家を守るためにセシリアは若くして勉学を極めた。箔をつけるため受けたＩＳ適性検査ではＡ＋を記録。これを見たイギリス政府から、国籍保持のため破格の好待遇で代表候補生の座を受けた。

そんなエリート街道まっしぐらなセシリアだが、その支えとなった人物が〝二人〟居た。一人目は彼女の専属メイドであるチェルシー・ブランケット。

そしてもう一人が噂の彼である。

オルコット家に古くから仕える執事家系であり、親子共々忠誠心の厚いルース家の一人息子。

名をルイス・ルースという。

二話「転校生はセカンド男子」

遅咲きの桜も散り始める４月下旬のこと。

（来い、白式）

織斑一夏は右腕のガントレットに左手を添えて目を瞑り、集中して相棒の名を呼ぶ。あれから更に一週間の猛特訓（本人談）によって格段にＩＳの展開速度は速まった。一瞬の浮遊感の後、圧倒的な全能感が体を包み込む。見れば隣のセシリア・オルコットも既に展開を終えていた。

「よし、二百メートルほど上空へ飛べ」

本日は織斑千冬先生によるアリーナでの実践授業である。一般生徒ならともかく、専用機持ちともなればその指導は一層厳しいものとなる。故に、そう言われてすぐさまセシリアは動く。この程度のことでダメ出しなどされては代表候補生の名が泣く。それはもう重力など感じさせないほどスムーズな機動である。一方、一夏の方はというと、セシリアよりも…かなり遅かった。

「何をやっている、スペック上の出力は白式の方が上のはずだぞ」

経験を蓄積し学んでいくどちらかというと努力型の一夏にとって、昨日習ったばかりの急上昇、及び急下降は難題であった。現在実習中なのは例の『自分の前方に角錐を展開させるイメージ』である。なんとか追いついた一夏に対し見かねたセシリアが

「一夏さん、イメージは所詮イメージですわ」

とアドバイスしてくれるが、そもそも浮いている感覚自体があやふやな一夏にとってはまだまだ過大な課題であった。

そもそも、

『反重力力翼と流動波干渉が…』

『こう、くいってかんじだ。』

前日まで粘って教えてくれる、今一番頼りになる教官達は素晴らしいセンスをお持ちのようである。とても真似できるようなものではない。

その後、

『ズドオオオンッ!!』
アリーナの地面に大穴を開けたことと
「遅い、０．５秒で出せるようにしろ」
自信があった武装展開にダメ出しをされて心に少しダメージを負ったことを除けば、
何も問題なく授業は進み、アリーナを一人で片付けて無事本日の実習は終了となる。
「遅かったな」
待っていてくれた（それなら手伝ってくれても良かったのではと一瞬思ったが）篠ノ之箒と共に寮に帰宅する。

時を同じくして
「ふうん、ここがＩＳ学園ね…」
小柄な少女が大きなボストンバッグを抱えて正面ゲート前に立っていた。
「えーと、受付受付っと…」
くしゃくしゃになった紙切れを一瞥し、再び握り込みポケットにしまった後、よく分からない広い敷地を歩き始める。
（お、ラッキー）
「ねえねえ、貴方ここの人？…整備科？まあいいや、本校舎一階総合事務受付…？ってどこにあるか知ってたら教えてよ」
入ってすぐ、たまたま見つけた男子に声を掛ける。この少女、コミュ力の塊である。
「？ああ、ちょうど私もそこに行くところです。どうぞ、着いてきてください。」
「そう？良かった～ここ広くてさ。分かりにくいのよねぇ。」
「ああ、確かに。もしかして（もう一人の）転入生の方ですか？地図などは…」
と他愛もない（？）会話をしつつ無事目的地に辿り着く。私はこちらですので、と先の男子は別れを告げ去っていった。
「ええと、それではこれで手続きは完了です。ＩＳ学園へようこそ、凰

鈴音さん。」
　転入手続きを済ませ、指定された寮へと向かう。
「さってと、あ、さっきの人にお礼言い忘れてたなぁ。…また会った時にでいっか。」
　サバサバと切り替え、スタスタと歩き出す。尚その後、知らない女子（箒）と親しげに喋る一夏を見かけ、会話内容から一夏がクラス代表だと見抜き、静かに怒る彼女であった。

　翌朝のＳＨＲ時間、鈴が一組に顔を出し宣戦布告、織斑先生に鎮圧され、絶妙に締まらない様子ですごすごと退散した後、
「はーい、今日はなんと皆さんお待ちかねの転校生を紹介しちゃいまーす！」
　異様に高いテンションの副担任山田真耶先生によって紹介されたセカンド転校生は
「ルイス・ルースと申します。皆様どうかよろしくお願い致します。」
　世界を驚かせたセカンド男子であった。
　因みに、予め彼がこの日に来ると本国より知らされており、終始微妙な顔をしていたセシリアを除いた全生徒が驚愕と歓喜に包まれた（何故か他学年他クラスからも雄叫びが聞こえた）。

三話「オルコット家との過去」

ルイス・ルースは執事である。オルコット家に仕える執事家系のルース家の一人息子である彼は、幼少期から所作、心構え等を叩き込まれて育ってきた。それに関しては何も疑問に思うところは無かったし、むしろ率先して両親に教えを乞うていた。

全てが変わってしまったのは、やはり三年前。オルコット夫妻が帰らぬ人となった事故。同行していた彼の父親もまた、その命を散らした。当然、彼は悲しみに暮れた。家内の全使用人、ＳＰから庭師に至るまで涙を流した。それほどに三人の死は重いものであった。

そんな中で、気丈にも立ち上がった人物がいた。セシリア・オルコットその人である。片親を無くして立ち直れなかった彼からは、どれほどその姿が気高いものに見えたことか。ましてや、将来仕えるべきと疑わなかった次期当主である。自分が支えようと、知らぬうちに上から目線になっていた自分を恥じた。この人に付いて行こうと、真に誓った瞬間であった。

それからは忙しかった。なにせ奮い立った彼らは、英才教育を受けていたとはいえまだ中学生である。頼りになりそうな親族を「財産を狙うハイエナ」と一蹴し、自分たちで切り盛りしていくのは至難の業であった。出来る勉学は全て終えた。最初のうちこそ、男など、と鬱陶しがっていたセシリアも彼の献身に在りし日の母親と執事を重ね、徐々に心を許し、幼いながらも立派な主従となっていた。

セシリアはその後、己に箔をつける意図もあり、受けたＩＳ適性審査では堂々のＡ＋を記録。箔どころかイギリス政府のお墨付きまで貰い、ＢＴテストパイロット一人目に抜擢。稼働データ、及び戦闘経験を得るために日本に渡った。彼と、もう一人の友人であるチェルシー・ブランケットに家を任せて…。

ところも時も変わってＩＳ学園の話。この世には臣下の礼、というものがある。相手に対し、自分が臣下（家来）であることを示す為の

動作（儀礼、儀式）＝礼を行うという意味である。普通の生活をしていては滅多にお目にかかれるものではない。のだが、運がいいのか悪いのか、目の前に躊躇なくそれをやってのける奴がいる。

ほんの少し遡って朝のＳＨＲ。いきなり紹介された二人目の男子にクラス中が浮足立ち、そわそわした空気が全体的に漂っている。思えば自分の時もそうだったなぁとしみじみしているのは一人目の男子、織斑一夏。自分も早く声をかけて、学園に二人しかいない男同士、連携を深めていこうと決意する。

そして、いざ、休み時間。教室中が一斉に椅子を蹴る音で溢れかえる…その一歩手前。件の彼がスッと立ち上がった。出鼻を挫かれ、たたらを踏む彼女らを後目にスタスタと、それはそれは優雅に歩き、足を止めて開口一番

「お久しゅうございます、セシリア様。お変わりないようで何よりです。」

片膝をつき、胸に手を当てて、臣下の礼を取る。少し遅れて慌てて一組の廊下に集ったクラスも学年も違う健脚家達も見惚れる程の鮮やかな礼であった。一部鼻血を出している者までいる。

これまでどこか憂鬱そうだったセシリアの態度はこうなることを見越してのことだったらしい。一夏と会う前の彼女ならば誇らしげにそれを受け入れたかも知れないが、乙女は既に恥じらいを知ったようである。

「ええ、貴方も。しかしここでそれは流石にオーバーですわ。それにほら、皆さんも貴方が気になるようです。」

その一言で周りの空気が息を吹き返す。今のなにー?とか、セシリアとはどういう!?とか、ご、ご趣味は？等の質問攻めは一限が始まるまで続いた。本人も真摯に答えるものだから、彼女たちの収穫も十分だったようである。ただ一人、結局話しかけることも出来なかった男子を除き。その後すぐ、ロッカーの場所に戸惑うところを救出することできっかけを得たようではあるが。

さて、昨日からの続きである実習訓練授業である。前回同様にＩＳ

の展開。しかし前回と違うのは、専用機持ちが三人に増えていることにあった。白い白式、青いブルーティアーズと来て、見慣れぬ〝エメラルド色〟の機体。

――非武装状態のＩＳを感知。操縦者ルイス・ルース。ＩＳネーム『エメラルド・ピュープル』。戦闘タイプ…該当なし。

セシリアと対峙したときと同様に白式からデータアナウンスが飛んでくる。が、戦闘タイプ該当なしとは…？

「次、武装だ。オルコット、前回のようなミスはないだろうな…

そこ、いつまで呆けている、集中しろ。」

ギンッ！と物理的圧力がありそうな眼光を前に、一夏は深く考えるのをやめた。

一方セシリア・オルコットは一夏のように気を取られるようなことは無かったが、内心は興味津々であった。データは本国から送られてきてはいたのだが、異様なデータ容量と、鈍く光る［秘匿案件］の文字に、ルームメイトがいる寮室で安易に開くのを躊躇った為である。

果たして、彼の手に現れたのは、分かりやすく言うとセシリアの主武装≪スターライトＭｋⅢ≫の少し小振りなものであった。名前は…≪試作量産型スターライト≫というらしい。試作なのに量産型とはなかなかユニークな武装である。

一方、色々な意味で注目を浴びている当の本人はというと、

（セシリア様、随分とお優しくなられた。他の女性方にならともかく、男性である織斑一夏様にまで笑顔を向けられるとは…一体何があったのでしょうか。）

終始微笑みを絶やさぬままそんなことを考えていた。

四話「個性的な転校生組」

昼休みの食堂、それは戦場でもある。限られた食券を求めて人は群がり、午前の勉強、運動で疲れきった脳や体に喝を入れるために、ひたすら食う…

なんてことはここ、ＩＳ学園ではそうそうなく。世界中から集められたエリートたちは、効率と娯楽を兼ねて軽食＋甘いものを頼みがちである。

そこには何故か、当然のごとく食券切れという概念が存在しない。どこか次元が違うようにも思えるが、この学園が設置してある場所、すなわち日本のメンツというのも関わっているのだろう。いくら国家不干渉地帯とはいえ、必要な食物すら出せないとあっては名が泣く。

そんな憩いの場だが、今年は空気が少し違う。まあ当然といえば当然なのだが、この学園には今年から男子という名の獲物が放り込まれている。しかも二人目まで現れた。寮の食堂とは違い学年の敷居がないこの場では、一目見ようと、一声かけようとする者たちもよく見受けられる。だが、悲しきかなその機会は基本的には無い。

何故なら、

「悪いが一夏の特訓は私が担当するのだ。」

ＩＳ生みの親である篠ノ之束の妹と

「そうですわ、わたくしが一夏さんの専任コーチでしてよ。」

特にＩＳ先進国であるイギリスの代表候補生と

「あたしは一夏に聞いてんの。部外者は黙っててよ。」

転校できるほどの腕があると思われる中国の代表候補生がその両脇を固めているからである。

しかし二人目。二人目ならば！と勇む者たち。

「セシリア様、お席の確保、完了いたしました。皆様もどうぞ。あちらです。」

轟沈した。

放課後の第三アリーナには最近固定客がいる。言わずもがな、織斑一夏、篠ノ之箒、セシリア・オルコットの三名である。それに加えて、今日はニューカマーがいた。
「何が可笑しい。不満でもあるのか？」
訂正、ニューカマーではなく、箒がＩＳを纏っていた。
「ま、さか…こんなにも早く訓練機使用許可をいただいて来るなんて…。想定外ですわ。」
通常、訓練機使用許可申請を通すには膨大な量の手続きが必要である。十数枚にも及ぶ紙束に全て目を通し、了承のサインをして申請。これまでならそう苦労はしないのだが、学園に十数機しかない訓練機を巡って学園のほぼ全ての生徒から申請が来るのである。当然先着順に回しているため、新入生が訓練機に触る事が出来るのは良くて半年後と言われている。
それをこの短期間で受領できるとは…何か裏がありそうではある。
ともかく、その日の訓練は熾烈を極めた。ざっくり説明すると
一夏の今日のコーチは近接指導で私だと箒が、
基礎訓練でわたくしだとセシリアが、
両者ともに主張し、結果一夏が巻き込まれた形である。理不尽だ。
因みに、箒は部屋割りが替えられた（当然男子は男子同士に変更された）ことにご立腹であり、いつにも増して不機嫌であった。

訓練を終えて、セシリアはピットへと戻る。箒は訓練機を返すのに必要だから少しアリーナに残って調整すると言っていた。
「あら、やっぱりここに居た。」
と、知らぬ人から声を掛けられる。入学前、学園のパンフレットか何かで見たことがある顔だ。確か…
「もしかして、更識会長ですの？わたくしになにか？」
そう、ＩＳ学園最強にして生徒会長、ロシア国家代表の更識楯無その人である。そんな有名人が自分に何の用だろうか。
「いや、私じゃあないんだけどね。君、〝先輩〟に挨拶しに行ってないでしょ。見かけたら言ってくれってしつこくてね？」

お姉さん困っちゃうな、と続ける。唐突に広げられた扇子には『年功序列』の四字。
「…あっ」
セシリアの端正な顔が青褪める。完全に忘れていたことだが、この学園にはもう一人、イギリスから来ている生徒がいる。代表候補生ではないのだが、整備課としての優秀な腕と、学園内に少数ながらコネを持っている。本国からは一度挨拶に行けと言われていた人物である。まさか向こうも同学年の男子に感けて一ヵ月も放置されるとは思っていなかっただろう。
「し、失礼しました。この御恩はどこかで必ず…ごきげんよう！」
慌てて走り去るセシリア。残された更識会長は口元を扇子で隠し、微笑みながら見送った。その扇子には『青春謳歌』の四字。

その後、なんとかお許しをいただき（寛大な人であった）、寮に帰宅したのはいつもより少し遅いくらいの時間であった。ドアを開けると
「お帰りなさいませ、セシリア様。今、紅茶をお入れします。」
何故か部屋にいる執事と、幸せそうな表情のルームメイトが談笑していた。…どうやらセシリアの苦悩はまだ終わらないようである。

五話「クラス対抗戦開幕」

昼食時。自分と同期で転入してきた中国代表候補生の凰鈴音が織斑一夏と接触した際の反応。織斑一夏が時々向ける笑顔に対して顔を赤らめる様子、そしてなによりも、これまで家にいた頃には見たことのない種類の笑顔…。

ルイスは決して鈍感ではない。人の心の機微というものは総じて学んでいたし、察していた。

つまり、気付いたのだ。主の密かな（？）恋心に。

（セシリア様がお選びになった男性…つまり将来的には彼が第二の主ですか。）

失敗など考えていないようである。

その彼から放課後に誘われる。

彼曰く

「俺、放課後は毎日箒とセシリアと特訓してるんだ。良かったらルイスも来ないか？」

とのこと。本来なら断る理由はない。だが、主の思いを知っているルイスとしては

「大変申し訳ございません。参加したいのは山々なのですが、何分来たばかりで荷解きなどもしていないのです。」

と断る。主と一夏、二人だけの空間ではないのが少し残念だが、そこはどうか頑張って欲しい。気遣いのできる執事であった。

夕方。事前にセシリアの部屋番号を聞いていた彼は久し振りに紅茶でも淹れようかと思い立つ。本人がどう思うかはともかく、これも彼なりの気遣いの結果である。同室の一夏にその旨を告げ、向かう。

当の主はまだ帰宅していなかった。

「はいはーい…ってルイスさん!?」

「突然申し訳ありません。セシリア様はいらっしゃいますか？」

「あ、あのー、えーと、まだ帰ってないっていうか…あ、良かったら！中へどうぞ！」

「?・ええ、分かりました。わざわざありがとうございます。失礼します。」
やや緊張気味のセシリアのルームメイトに、持参したハーブティーを振る舞いながら談笑する。その後、どこか疲れた様子で帰ってきたセシリアに蹴り出されるまで。
翌日。寮の、自分に限らず女子部屋には絶対に入るなと主からの君命をいただいた。

試合当日。1年生第一試合は第二アリーナでの一夏ｖｓ鈴。あの後、一夏はなにやら鈴を怒らせてしまったようで、今回の試合にかける鈴の思いは相当強いようである。気迫が凄い。謝れば痛めつけるレベルを下げるくらいはしてあげるとか何とか言っている。会場全体ドン引きである。そうしたうちに開始のブザーが鳴り響く。
戦いはやはりというかなんというか圧倒的に鈴の有利だった。最初こそ互角に斬りあっていたが、鈴のＩＳ≪甲龍（シェンロン）≫の特殊武装『龍咆』の見えない銃身から来る見えない弾丸に一夏は翻弄され、徐々にシールドエネルギーを削られていく。
（やるしか…ない！）
一夏の顔つきが変わる。一夏はこの一週間、織斑千冬先生に教えてもらいながらある一つの技能を習得していた。その名も『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』。白式に搭載されている大小のブースター全てを加速に回し、初速から全速で相手に一直線で迫る技能。これを用いてバリアー無効化攻撃である白式の単一仕様能力（ワンオフアビリティ）を当てることで相手のシールドエネルギーを一気に消し飛ばす算段である。
ただし、奇襲というのは、その名の通り奇なる襲い方である。一度見せてしまっては、奇襲は既襲となる。相手が代表候補生、自分にはまだそれほどの技量がないとなると、実質効果があるのは一度きり。
それでも覚悟を決め、爆発的に加速し…

突如、アリーナ全体に衝撃が走った。

六話「クラス対抗戦早期閉幕」

表れたのは漆黒のＩＳ。今となってはほぼ見なくなった全身装甲（フルスキン）。それも顔面まで覆っている。
「全生徒へ緊急放送！速やかにアリーナを出ろ！」
織斑千冬教諭の対応は速かった。場慣れしているかのような手際の良さに頼もしさすら感じる。
だが、
「ダメです！遮断フィールド全閉鎖！放送機器までハッキングを受けています！」
相手の対応の方が速かった。
「…ならばアリーナへの直通を利用して試合中の両名へ連絡しろ、教員が行くから下がっていろ、とな。」
「はい！…『織斑君！凰さん！…』」
（このＩＳ学園に侵入どころかハッキングまで仕掛けるか…この時点で絞り込めるが、隠す気などないということか）
山田真耶教諭の勧告中、千冬は思考する。
「いや、先生たちが来るまで俺たちで食い止めます。」
弟の勇ましい言葉。気に食わないがそれが一番理に適っている。これもすべて相手の思惑通りなのかも知れないが。
「本人たちがやるといっているなら、やらせるしかないだろう。」
「な、何を悠長なことを言っているんですか!?」
「まあ、コーヒーでも飲んで落ち着け。」
「…織斑先生。それ、塩なんですけど…」
「…いや、そんなことは無い。さあ、飲め。私は要らん。」
「そんなぁ…」
「熱いので一気に飲み干すといい。」
悪魔である。
「織斑先生！わたくしに出撃許可を！」
それから少しして状況を見て取ったセシリア、箒、ルイスが指令室

内に駆け込んでくる。
「そうしたいところだがこれを見ろ。」
　次々に表示される遮断シールドの情報は全て緊急閉鎖（レベル4）でロックされている。全てあのＩＳの仕業らしい。また、システムクラックには現三年の精鋭たちがあたっているが、これも相当に時間を食う。隠し切れない苛立ちが、画面を小刻みに叩く千冬の指に表れていた。
　誰もが思考する中、おもむろにルイスが口を開く。
「でしたら…」

「…なあ鈴。アイツの動き、何だか機械じみてないか？」
「ＩＳは機械よ。」
　何言ってんの、と息を吐く鈴。避けながら呆れるとはなかなか器用である。
「いや、そうじゃなくてだな…なんというか、人間らしさを感じないんだ。あれ、本当に人が乗ってんのか？」
「言われてみればそうかもしれないけど…ううん、ＩＳは人が乗らなければ動かない。そういう風に出来ているはずよ。」
「だけど、例えば今だって俺たちが話していると攻撃してこないし…仮にだ、もし無人機だとしたら」
「勝算はあるってわけ？」
「ああ、何せ思いっきりやれる。」
「…ＯＫ、じゃああれを無人機だと仮定して…」
『織斑一夏様、聞こえますか？』
「ん？ルイスか!?」
『はい、ご無事そうで何よりです。時間がないので手短に。現在の第二アリーナＣブロックは生徒全員の避難が終わっています。その近辺のシールドに零落白夜を当ててもらえないでしょうか。』
「え…シールドに、って…良いのか？」
『はい、既に織斑先生からの許可も取ってあります。ご健闘を。』
「あ、おい、ちょっと!?」

唐突に切れるプライベート・チャネル。
「どうする一夏。」
「…やるしかない、か。隙を見計らって行くぞ！」

ルイスの提案した作戦案はいっそとてもシンプルだ。生徒の退避が完了したブロックに教員ＩＳ組を集結させ、一夏の零落白夜で開かれた場所から突入していくというもの。既にクラックを終えた場所はいくつか存在するし、十分可能な範囲だった。問題があるとすれば一夏のエネルギー残量くらいか。チャンスは一度きりである。

かくして、鈴が決死の覚悟で繋いだ数秒間を使い、一夏はアリーナの遮断シールドの一部を無効化するのであった。

～世界のどこかで～
「あぁ～そんな簡単に済まされちゃうかぁ。最適解だけど面白くなぁ～い！」
彼女にしてみれば計画は九割方成功していた。織斑一夏の実力確認、織斑千冬へのアピール、新型の実験。だが残り一割がとてもとても重要なことだった。「篠ノ之箒に無力さを実感させること」である。これだけはあやふやで終わってしまった。
「んー、まいっかあ！箒ちゃんを信じてお姉ちゃんは待ってるからね～！」
かくしてこの事件の黒幕にして天災と謳われた兎は満点の笑顔を満天の星空に向けるのであった。

七話「酷薄な現状と告白のチャーハン」

ここ、ＩＳ学園には様々な噂話がある。民間で叫ばれる眉唾なものから国家間で囁かれる真実味を帯びたものなど、内容は多岐にわたる。例を挙げると、「ＩＳ学園には世界を滅ぼすほどの兵器がある」、「篠ノ之束はＩＳ学園に居る」、「コアを生産する技術が既にある」等。尤も、これらは全くの的外れということはない。ＩＳは世界を滅ぼしうる兵器であるし、本人は居ないが篠ノ之束が昔使っていたラボがあったり、コアを生産する技術は日夜進められている。

そして、それら全てを内包する空間こそ、現在千冬が向かっているＩＳ学園の地下施設である。

ＩＳ学園敷地内地下５０ｍに存在するこの空間は、現在のＩＳ技術の世界最先端を行く施設である。かつて篠ノ之束が作り上げた機械類は未だ人類が辿り着いていないほどの高スペックを誇り、ほとんど消去されたデータを繋ぎ合わせ、補完し、コア製造の技術を研究し続けている。

そしてここに、また新たな研究資料が到着した。先日鹵獲した正体不明ＩＳである。

「あ、織斑先生。解析完了しましたよ。やはりあれは無人機です。本来人が乗るはずの場所は全て機材でいっぱいで…その機材も内部損傷が激しく、復元解析ともに不可能でした。」

入って早々、解析をおえた真耶がやや緊張気味にこえをかける。

「…そうか。ご苦労だった。他に分かったことは？」

「はい、武装などはこちらに。それから…どのような方法で動いていたかが分かりません。コアは登録されていないものでした。」

知っているのは千冬たち数名のみだが、４６８個目のコアが認められた、認められてしまった瞬間である。しかも、そのＩＳはどの国家でも開発に成功していない「遠隔操作（リモート・コントロール）」、または「独立稼働（スタンド・アローン）」の技術を搭載している。

「…そうか、やはりか。」

「もしかして、お心当たりが？」

どこか確信めいた千冬の返答に、真耶が問う。
「…いや、ない。」
（今はまだ、な。）
鋭い視線はどこか遠くを見つめていた。

コンコン、と、やや控えめなノック。騒動後の夕方、誰かがルイスの部屋の戸を叩く。
「？　はい、どなた様でしょうか？」
聞きながらドアを開ける。そこには
「わ、私だ。…今良いだろうか？」
意外なことに篠ノ之箒が立っていた。緊張しているのか、視線がやや泳いでいる。
「私ですか？構いませんが一夏様はいらっしゃいませんよ？」
「ああ、それは承知している。少し頼みがあってな。」
一夏は乱入ＩＳと直接争ったため、現在は事情聴取、及び万一のため精密検査を受けている。この分だとまだしばらくは帰ってこないだろう。
「私に、料理を教えてはもらえないだろうか。」
「…なるほど、そういうことでしたか。ええ、構いませんよ。」
以前セシリアが、〝自分も〟彼も料理が出来ると口を滑らせた故の頼み事らしい。余談だが、彼の主はほとんどが完璧だが、こと料理に関しては絶望的である。家系もそうだが何より必要性に駆られたため、身に付いたスキルである。
「それで本日は何をお作りに？」
「うむ、チャーハンだ。」
イギリス人に中国料理を聞いてくる日本人という実に奇妙な図が出来上がった。

その後、帰宅した一夏に箒がチャーハンを振る舞うという実に微笑ましい展開があった。気を利かせて外出していたルイス。帰宅時に真っ赤な顔をして走り去る箒を目撃した。

「一夏様、何かお有りで？」
「お、お帰りルイス。いや、何か箒に買い物に誘われてなぁ。いつの事なのか聞きそびれちまったが…そういや来月の学年別個人トーナメントが何とかって言ってたな。」
…篠ノ之箒の決死の告白はどうやら無自覚のうちに失敗したようである。

幕間「彼ら彼女らの休日」

「…これですわ！」

自室、金髪縦ロールのお嬢様は「思いつきましたわ！」と何やら誇らしげな、また実に晴れやかな顔をして金曜日の夜を過ごす。

「…そうだこれよ！」

自室、黒髪ツインテールの少女は「名案！」とにんまり笑いながら金曜日の夜を過ごす。

「これだ…！」

自室、黒髪ポニーテールの大和撫子は「完璧だ…！」と会心の笑みを零しながら金曜日の夜を過ごす。

三者三様とは昔からある言葉だが、果たして三様と言えるほど違う過ごし方をしているのか微妙なところだった。

土曜日、朝十時。人によってはまだ寝ているかもしれないが、ＩＳ学園ではこの時間帯の起床はイコール朝食抜きを意味する。こうして極一部を除きＩＳ学園生徒は規則正しい生活リズムを身につけていくのである。

さて、場所はＩＳ学園寮唯一の男子部屋。

「たまには俺が緑茶を淹れてやるよ。」

毎朝決まって紅茶かコーヒーを出すルイスに代わって今日は一夏が日本の味を教えるようである。

「自分がしてもらうというのは…中々落ち着かないものですね。」

「職業病かよ…」

今日も流れる和やかなひと時。英国人が初めて日本のお茶に触れるというのは実に微笑ましい。尤も、様々な国の人間が集まるここＩＳ学園では珍しいことではない。

だが、平穏というのは長く続かないのがこの世の常である。

コンコン、と。扉を叩く音。来客のようである。ここ最近は周りもようやく落ち着いてきていたので、珍しいことである。

「はい、どなた様でしょう？」

『セシリアですわ。』
ガチャ。迅速な開錠である。
「おはようございます、セシリア様。何か御用でしたらこちらから参りましたが…それとも一夏様でしょうか？」
「え、ええ。いえ、今回は二人とも、ですわ。貴方ともまだきちんとお話していませんし、その、一夏さんの事も…」
「ええ、そのことは万事心得ております。折を見て私は出ます。」
「…貴方が居てくれて、本当に助かりますわ」
がっちり握手。はじめは開錠の速さと察しの良さに若干引いていたがそれが味方であると分かった以上頼もしいものである。密約は交わされた。
「一夏様、今朝はセシリア様もご一緒するようです。」
「お？珍しいな、セシリアか。分かった。もう一人分持ってくるよ。」
「失礼いたしますわ。」

そうして三人で談笑すること数分。
コンコン。
今日は来客が多いようである。失礼します、と先ほどと変わらず席を立つルイス。
「はい、どなた様でしょう？」
「あ、私。鈴よ。」
（おや？これはまた珍しいですね。）
少々意外に思いながらもドアを開ける。
「おはようございます、鈴音様。本日はどのようなご用件で？」
「堅苦しいから鈴でいいわよ。ってそういえばアンタに名前を呼ばれたの何気に初めてね。」
来た当初こそ顔は合わせたが、鈴はその後一夏と一悶着あったらしく、そういえばしばらく話していなかった。
「そうそう、あの時のお礼もまだだったしちょうどいいかと思ってね。上がってもいい？一夏も居るんでしょ？」
前半も本音だがどうやら本命は後半のようである。靴の有無をさ

り気なく確認しているあたり確実に。
「…ええ、どうぞ。一夏様もいらっしゃいますよ。」
一瞬主との密約（）が気になり怯むルイスだったが、ここで不自然に応対しては家名が泣くというもの。意外と健気である。
「一夏様、セシリア様。その…追加のお客様です。」
「やっほー、一夏。来たわよー…ってなんでセシリアも居るのよ!?」
「そ、それはこちらのセリフですわ！」
「…まあもう一人分持ってくるか。」
どうなっていますの！と言いたげな目でキッとルイスも睨むセシリア。密約とは（）

お互いに牽制しあいながらぎこちなく過ごすこと一時間弱。時刻は十一時頃の事。
コンコン。
先程と同じく以下省略。
あ、これ嫌な予感しかしない（ですわ）、と女子二人。
「はい、どなた様でしょう？」
「私だ。篠ノ之だ。」
ここまで来るとルイスももはや察している。それでも形は崩さず。
「おはようございます、箒様。本日はどのようなご用件で？」
「ああ、この間のお礼にな。お陰で、その、なんだ…ちゃんと言えたのでな。改めてありがとう。それと、一夏は居るか？今日の昼食も自作しようと思ってな。三人でどうだ？」
「その、三人と言いますか…取り敢えずお上がりください。」
「あ、ああ…」
玄関には整った靴が三足。今のルイスの分で四足。明らかに不自然だが緊張で上の空な箒は気付かなかったようである。
「あの…新たなお客様です。」
流石に申し訳なさそうなルイス。
「い、一夏っ。そのだな、これからの昼食だが…ってなぜセシリアに鈴までも居る!?」

「ちょ、それはこっちのセリフよ！」
（あー、やっぱり、ですわ。）
「…もういっそポットごと持ってくるか…？」
　こうして三人が三人とも前日夜から夢見た一夏との休日は叶ったものの、肝心の「二人きり」という部分は抜け落ちてしまったようである。この後、自棄になった三人＋付き合わされた二人による三国合同昼食パーティが開催されたとか。

八話「二人の刺客と三人目」

学年別個人トーナメント。文字通り学年別で行われる個人のトーナメントである。一週間という実に長期間にわたって開催されるこのイベントは一部の企業にも開放されており、生徒たち、特に三年生にとっては重要なアピールポイントとなる。また、企業としても有能な人材の発掘の場として重宝されており、三年生は勿論のこと、二年生の成長確認、一年生の発掘と用途は多岐にわたる。

そんなイベントだからこそ、生徒は全員強制参加である。また、将来を見据えるなんだかんだエリートな彼女らは、総じて士気も高い。

更に、

「ねえねえ、あの噂、聞いた？」

「あれって…ああ、あれよね。」

「なになに？良い話？悪い話？」

「とびきり良い話！」

とびきり良い話により追加のやる気スイッチが押されているようである。

「え！それって本当!?」

「マジもマジ！優勝したらどちらかの男子と付き合えるんだって！」

「それって本人に確認とかは…？」

「…さあ？」

取れていないようである。

ＩＳを纏うにあたって重要な問題の一つにＩＳスーツがある。ＩＳより内側で体に密着するこのスーツは体の動きをダイレクトに伝えるという意味においてとても慎重に選ばなければならない。

…という事情があるのだが、そこまで来ると逆に汎用品は一本化されていく。今ではＩＳスーツを作っている会社それぞれも材質は同じものであり、違うのは各社ごとのデザインくらいである。

「ＩＳスーツは肌表面の微弱な電位差を検知し、動きをダイレクトにＩＳに伝えることによって動作をスムーズにするものです。耐久性

にも優れており…」
と、ヤマヤ（生徒命名）の説明が続く。山ちゃん（生徒命名）は本日上記の通り重要なＩＳスーツを選ぶ生徒たちのため勉強してきた（本人談）ようである。流石山ぴー（生徒命名）。まーやんは真面目っ子（生徒談）である。
「諸君、おはよう。」
「「おはようございます！」」
弛緩した空気は一瞬で軍隊式にチェンジ。一瞬である。あ、ちゃんと出したスーツ着てくれてるな、とか悠長に構えているのは一夏だけ。思考が読まれるのは当然である。
「今日からは専用機持ちでない者も本格的な実践訓練を開始する。訓練機とはいえ気を引き締めるように。ＩＳスーツは各人のものが来るまでは学校指定のものを着用しろ。忘れた者は学校指定の水着か下着で出てもらう。覚悟しておけ。
…では山田先生、ホームルームを。」
「は、はい！」
気圧されかけていた山田先生は何とか立て直し、これまた唐突に告げる。
「今日はなんとですね、またまた転校生を紹介しちゃいまーす！しかも二名です！」
「「えええええ!?」」
実にナイスなリアクションである。
そうして入ってきた二人は、
「失礼します。」
あはは、とはにかむ〝皇子〟と
「・・・・・・」
何も言わず鋭い眼光を放つ〝軍人〟であった。

九話「サード・男子・インパクト」

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします。」
そう言ってさわやかに微笑みながら一礼。とても様になっている。どこかの王子様のようだ。
…そう。王子様のようなのである。
「…お、男？」
と誰かが、余裕がなかったのだろうか遠慮がちに無遠慮に聞く。
「はい、こちらに僕と同じ境遇の方が居るということで本国より転入を…」
瞬間、震撼。これが噂に聞く音の波、ソニックウェーブというやつであろうか。人好きのしそうな微笑み、礼儀正しい仕草。そして金髪。冗談ではなく皇子、貴公子などの印象を受ける。
「男子！男子！」
「三人目！しかも立て続けにうちのクラス！」
「美形！守ってあげたい系の！」
「お父さん、お母さん、私、幸せに生きてるよ…！」
それにしても相も変わらず元気なクラス。ＩＳ学園の顔こと１年１組です。皆さんこんにちは。
「やっぱり探したら案外居るもんなんだな～」
「そのようですね…」
と、事の重大さが他の半分も分かっていない男子二人組である。
「あー、騒ぐな。静かにしろ。」
めんどくさそうに千冬がボヤく。本気で止めようとはしていないらしい。正しい判断である。何せ止まる気配がない。
「み、皆さんお静かに！まだもう一人居ますから～！」
対して山田先生は必死に暴走気味の生徒達に語りかける。功を奏したのは山田先生の努力か、もう一人への好奇心か、
「・・・・・・」
…それともこの、先程とは正反対の絶対零度の視線か。…ともか

く、クラスは一旦落ち着いたようである。
「挨拶をしろ、ラウラ。」
　これまためんどくさそうに千冬が促す。
「はい、教官」
　言われた途端、二人目の転校生はザッ！と音が鳴る勢いで姿勢を正し、
「ラウラ・ボーデヴィッヒだ。」
　挨拶、終了。
「お前も挨拶をろくに出来んのか…それとここでは織斑先生だ。そう呼べ。」
「は、了解しました。」
　余りの異質な空気感に一同沈黙。と、不意に一夏とラウラの目が合う。
「貴様が……！」
　合うや否やつかつかと歩み寄る。目と目が合った瞬間好きだと気付いた…
　パァン！
　…訳では断じてない。断じて。代わりに示すは容赦ない平手打ちである。一瞬混乱する一夏。周りも同様。
「い、いきなり何しやがる！」
「ふん…」
　再度睨みつけ、空いている端っこの席に座ると腕を組んで目を閉じる。清々しいまでのガン無視である。
「…色々と言いたいことはあるが時間が押している。ここでＨＲを終わりとする。各人すぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でＩＳ模擬戦闘を行う。以上、解散！」
「……！やっべ！」
　言い終わるや否や一夏、ダッシュ。…と思ったら戻ってきて一言、
「ルイス！シャルル頼む！お前なら大丈夫だろ！」
「畏まりました。シャルル・デュノアさん。私はルイス・ルースと申します。さあ、どうぞこちらへ。時間も押しておりますのでお早めに。」

「う、うん…？」
　一夏、再度ダッシュ。因みに、これは一夏が無責任なのではない。実績に基づいた判断である。というのも…
「織斑くん発見！者共！出会え出会え～！」
「きゃー織斑くーん！」
「待てー☆」
「やっぱりこれかよ！」
　移動教室の度に一夏は追い回される。追い回す彼女らはノリは軽いが目は本気（マジ）である。捕まったら何をされるか分からないという恐怖感がある。あと、なんとなく一夏相手なら良さそうな気がするのだろう。
　対して、
「お！ルイスくん発見！者共！出会え出会え～！」
「きゃールイスくーん！」
「…申し訳ありません。お話したいお気持ちは分かるのですが何分今日は急いでいる上にお客人もいらっしゃいますので…」
「「あ、はい。」」
　本当に申し訳なさそうに謝るルイスに何かできる訳では無いようだ。
「あ、隣にいるの、もしかして…！」
「はい、今日からの転入生だそうです。彼に案内をしなければなりませんので。通していただけませんか？」
「「あ、どうぞ。」」
「ありがとうございます。」
「えと、あ、ありがとう？」
　美少年二人からの感謝の言葉でほっこりする女子一同であった。
「お、ルイス。それと、デュノアもお疲れ！俺は織斑一夏だ。一夏って呼んでくれ。よろしくな。」
「うん、ありがとう一夏。二人とも僕のことはシャルルでいいよ？」
「一夏様もご無事で何よりです。それから私もルイスで構いません

よ、シャルル様。」
「様、かぁ。なんだか歯がゆいね。」
一戦乗り越えた戦友たちはこうして友好を深めるのであった。
「うわ！時間ギリギリだ！急がないとだぞ！」
といって制服を脱ぎ、上半身裸になる一夏。
「わあっ!?」
それをみてあたふたするシャルル。
「では、私はあちらで。」
「あ、えと、僕はあっちで！」
渡りに船とはこの事か。それぞれロッカーを挟んで三列着替えである。
その後、着替えに手間取った一夏だけが遅れ、ありがたいご指導（出席簿アタック）を頂戴した。シャルルくん、よく見ておくのだ。あれがこのクラスの掟だ…と誰かが囁いた。その娘も叩かれた。中々インパクトの強い初日である。

十話「再興し、来校し、邂逅す」

彼女はこの世に生を受けた瞬間から〝軍人〟であった。軍人として生まれ、軍人として育ち、軍人たれと教育を受けてきた。「パパ」や「ママ」の代わりに好奇の目で見てくる研究者が居た。玩具の代わりに銃を、遊びの代わりに殺し方を学んだ。友達の代わりに同僚がいた。それらは等しく先に逝った。残ったのは彼女独りだった。それがドイツで初めてのデザインベビー実験成功体、「ラウラ・ボーデヴィッヒ」だった。

この人生を憂いたことは無かった。閉鎖された軍施設の更に奥深く、研究施設で育てられては疑問を持つほうが難しいというもの。他の人生など端から存在しないのである。

実験は大成功だった。軍人としての最適解、お手本のような遺伝子を持った彼女は常に成績トップだった。周りの〝仲間たち〟は彼女を持て囃した。ラウラという成功例をきっかけに次々と妹が生み出された。黒兎隊（シュバルツェ・ハーゼ）と名付けられた彼女らはドイツ軍の奥の手として確固たる地位を築いていった。

そんな黄金期は僅か五年で幕を下ろす。今から十年前、ラウラ五歳の時である。自軍のミサイル発射管全てがハッキングされ、一箇所を狙う。攻撃目標は日本。この世に「兵器としてのＩＳ」が生まれた日であった。

ラウラにはＩＳ適性がほとんどなかった。エリート街道をひた走ってきた黒兎たちは突然横から愉快な兎に蹴落とされた。生まれて初めての屈辱。向けられた期待の目はいつの間にか失望の目に代わっていた…。

それでも諦めなかったのは彼女たちだけではなかった。親的存在である研究者たちだ。尤も、彼らからすれば等しく消耗品である。親愛の情が湧いたわけではない。ただ単に、今までの研究成果が道半ばにしてその花弁を畳みかけていることに対して強い憤りを覚えただけである。金銭的にも新しい個体を作るよりはこれまでのモノをリサイクルした方が良かった。そうして生まれたのが生体同期型ナノ

マシン『越界の瞳（ヴォーダン・オージェ）』。ＩＳから送られてくる様々な情報を、生体同期したナノマシンにより素早く、正確に、多量に脳へと送り、処理することで視覚信号伝達の爆発的速度向上と超高速戦闘状況下における動体反射の強化を促すものである。分かりやすく言うと動体視力と反射神経の大幅強化である。被検体一号にはやはりラウラが選ばれた。完全成功には至らなかったが、一定の効力を発揮した。

軍の最前線からゴミ処理場まで行きかけたラウラはぎりぎりのところで一般兵程度の枠に収まった。

そこからもう一度、最前線まで引き上げてくれた恩人がいる。この教室に。すぐ隣に。そのことだけで、彼女は胸が熱くなった。再会した世界最強（ブリュンヒルデ）、織斑千冬元教官は相変わらず強い人であった。

（それに比べて…）

教官に教えていただいているにも関わらず、なんて愚かな生徒たちだろうか。ＩＳは兵器、すなわち銃や戦車と同じである。それを教えるところとなれば、それはもう軍学校である。にもかかわらず、何なのだこの腑抜けた者たちは…。ＩＳをファッションか何かと勘違いしているのではないか？

「挨拶をしろ、ラウラ。」

内心の憤りを隠すこともなく考え事をしていたら、不意に教官からお声がかかる。

「はい、教官」

自分も腑抜けていてはいよいよ駄目だ、と自分に喝を入れ、居住まいを正し、

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ。」

挨拶は簡潔に。これ大事。

「お前も挨拶をろくに出来んのか…それとここでは織斑先生だ。そう呼べ。」
「は、了解しました。」
何故か怒られた。思わず目線が下がる。
と。
一際腑抜けた顔でこちらを見つめる者が最前列にいた。瞬間、消えかけた炎にガソリンが撒かれる。どこか教官に似た、整った顔立ち。視線の先に居たのは…
「貴様が…!」
教官の唯一の汚点を作った張本人か!
パァン!
教室中に乾いた音が響き渡った。

十一話「孤高の一人と不運な二人」

「最近の成績は振るわないようだが、なに、心配するな。お前たちは一ヵ月で部隊最強に返り咲く。なにせ私が教えるのだからな。」
あの人は…織斑千冬はそう言った。そして事実その通りであった。何か特別な機材を使うのではなく、何か薬を投与されるのではなく。ただ、あの人が教えたことを忠実に実行していくうちに私はＩＳ専門となった部隊にて最強の地位を取り戻した。
だが満足はしなかった。部隊内では自分が最強になったが、それを超える存在と邂逅してしまった。強烈に魅せられた。憧れた。追いつきたいと思った…。
「どうすれば、教官のように強くなれるのでしょうか。」
「強く、か。
…私には弟がいる。あいつを見ていると、時々分かるときがある。強さとは、その先にあるものとは…。いずれお前にも分かる時が来るだろう。そうだな、日本に来ることがあれば会ってみるといい。」
そう言って気恥ずかしそうな表情を浮かべる教官。…それは、その顔はいつも見ている凛々しい、強い顔ではなかった。私が憧れる強い教官の、弱い部分だった。当然、許容できるものではなかった。
（断たねばならない。教官を完璧でなくする存在を。）
それはもはや信仰だった。

授業開始。教官の弟はあろうことか一人遅れてきた。物凄くいい音をたてて教官の出席簿が降り注ぐ。自業自得である。続けて一発。今度は別の生徒に。腑抜けていれば当然である。さらに二発。英国と中国の代表候補生が餌食となる。代表候補生にもなって不注意で指導されるとは落ちたものである。これも当然だ。
（しかしまったくもって不甲斐ない。この数分間のやり取りだけでこの学園の生徒の程度が知れる。）
はやくも全生徒を見限ったラウラであった。

「くう、何かというと人の頭をポンポンと叩いて…！」
「一夏のせい一夏のせい一夏のせい…！」
代表候補生二人組はというとこの具合である。その後、何やら一夏と揉めたことに気付かれた鈴が模擬戦に駆り出される。…何故かセシリアと共に。完全なるとばっちりである。
お相手はなんとあの山田真耶先生。驚くべきことに元日本代表候補生だったらしい。鈴、セシリアペアはいいようにあしらわれていた。
「さて、これで皆にも教員の実力は伝わっただろう。以後は敬意をもって接するように。」
挙句の果てには、言い方は悪いが山田先生の評価上げのダシとなる。この二人、今日はツイていないようである。
「さて、専用機持ちは…織斑、オルコット、デュノア、凰、ボーデヴィッヒ、ルースの六人だな。では、七人グループになって実習を行う。各専用機持ちに付いて班分けをしろ。」
そうしてようやく始まる実習訓練。当然のことながら鈴、セシリア、ラウラは人気度が低かった。特にラウラ班など完璧にお通夜ムードであった。

十二話「サンド・ウィッチ」

「…どういうことだ」

時刻はお昼、場所は屋上。普通の学校では屋上開放などされていないがここＩＳ学園は例外であった。

さて、端を発したのは篠ノ之箒。あの世界的に有名な迷惑博士の妹というそれはそれで有名な肩書を持った人物だが、現在はまた違った意味でも、学園内では有名である。

曰く、「織斑一夏に告白した／優勝したら付き合うと確約させた」人物である、と。本人としては断じて違うと言い張りたいが、噂が独り歩きして収まりのつかない状況である。

そこで、箒が打ち出した第二作戦。即ち、一歩でもリードしようという画策。授業中に鬼の目を掻い潜り取り付けた一夏との昼食の誘い。勿論二人きりの、である。が、

「なぜおまえたちまでここに居る！」

「え、皆で食べたほうがいいだろ？賑やかだし。」

現れたのは総勢五人の少年少女たち。想定の五倍である。しかも元凶は誘われた一夏である。

「そうではなくてだな…！」

「折角の昼食なんだし大勢で食った方がいいだろ？それにほら、シャルルが学食に一人で行ったら…」

「ん？なにかまずいのかな…？」

「…あぁ、それはまあ、確かにそうだが…」

はぁ、とため息をつく箒。そうだ、昔からこいつはこういうやつだった…と肩を落とす。その手の先には二人分のお弁当。聞けば一夏と自分用に作ったんだとか。一夏的にはグッと来たらしい。食費が浮いた、と。更にがっくり。流石に可哀そうである。

「あ、はい、一夏。あんたの分。」

そんな会話を繰り広げていると横からタッパーが伸びてくる。最新の便利グッズとかではなく、凰鈴音お手製の酢豚のようである。一夏的には以下略。

「一夏さん、本日はわたくしもこのようなものを偶々偶然何の因果か持ち合わせておりまして。よろしければおひとつどうぞ。」
「お、おう。あー…後でもらおうかな…？」
　お次のアピールはセシリア・オルコット。『見た目には』すごく美味しそうなサンドイッチが彩り豊かに並んでいる。だが、騙されてはいけない。このセシリア嬢、実は料理の腕前は壊滅的なのである。不用意に手を出すと笑顔で気絶できる。見ていた鈴は見えないように顔をしかめ、箒は見向きもしない。
「まあまあそう遠慮なさらずに。わたくしとルイスで作った共同作ですから自信もありましてよ？」
「あ、じゃあいただきます。」
「どうぞ、こちらです、一夏様。」
　しかし一夏、この変わり身。別に男気がどうこうではなく、これが安心して食べられるものだと判断したからである。ルイスが手伝ったことが要因である。
『む、色がおかしいですわ。…こちらなど入れてみましょうか。』
『セシリア様、それでしたらこちらのほうがよろしいかと。こちらにすることで香りも色合いもよくなります。』
『なるほど、分かりましたわ。ではそちらにしましょう。』
　一見魔女の実験のように思える会話だが、ルイスはこのような誘導により常に味を正常に戻している。何をどのように入れるかによって味のバランスを取る、ぶっちゃけ神業である。これにより、「見た目は良いが味がおかしい料理」が「見た目も味も極上だが何が入っているか全く分からない料理」へとグレードアップ（？）している。
　因みに、ルイスはこれらをストレートにおかしいと突きつけることは決してないため、セシリアの料理下手は治る見込みがない。この事情を知っているのは今のところは一夏、箒、鈴の三人だけである。
「…」
　それはそうとしてやはり何が入っているのか全くの謎では気味も悪いというもの。箒も鈴も一様に微妙な顔をしていた。
　味がいいなら大丈夫だと一夏は笑顔だった。これ美味しいねえ、と

事情を知らないシャルルと共に。

十三話「波乱の予感」

「じゃあ、改めてよろしくな、シャルル。」
「うん、よろしくね、一夏、ルイス。」
「こちらこそ。よろしくお願いいたします。」
　放課後、授業も終わって下校時刻。いつかのように山田真耶教諭より部屋割りについての話ということで呼び出された。告げられた内容は
「取り敢えず少しの間三人でお部屋を使ってください。」
　とのこと。流石に短期間で受け入れすぎたらしく、生徒同士の配置に手間取っているのだとか。当然ながらここＩＳ学園には多国籍かつ多数の生徒が入り乱れており、部屋割りなど特に気を使わなくては諍いが起きる。が、それにはやはり時間がかかる。故にこうして期間を設けて万が一の時の不平不満を抑え、同時に生徒同士の相性も確認しているのだろう。
　そうして帰宅後、本日はルイスのコーヒーで一息入れつつの冒頭会話である。ベッドの位置や(三つ均等に左、中、右と配置されていた)、シャワーの順番など最低限のことを話し合った。
　同性とはいえ中性的なシャルルの素直な笑顔に一夏が少し照れ、それが余りに分かりやすいので他二人とも微笑むというほのぼのした一幕が展開されたりもした。
「そういえばさっき一夏は放課後にＩＳの特訓してるって聞いたけど、本当？」
「ん？ああ、俺は他の皆から遅れてるから、少しでも追いつきたいと思ってな。」
　因みに普段は毎日だが、今日はシャルルのお引越しの事もあり休みである。
「ルイスも？」
「ええ、少し前からご一緒しています。」
　セシリアの邪魔はすまいと遠慮してきたルイスだが、先日遂に折れた。一夏に直接「せめてセシリアの言ってることだけでも分かりやす

くならないか」と相談された為である。
「ふうん、そうなんだ。それじゃあ僕も行っていいかな？ここまで良くしてもらったお礼もしたいし、専用機もあるから何かの役には立つと思うんだ。」
「おお！それはありがたい話だ、ぜひ頼むよ。」
一夏待望の二人目の『話が分かるコーチ』である。この日は快眠であったという。

そうしてシャルルを加えた放課後特訓を続けること五日。
「うーん、だからね、一夏が射撃武装に弱いのはその特性を理解してないからなんだよ。」
と、笑顔でシャルルが事も無げに言う。橙色の装甲をした、バランスのいいＩＳである。名をラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡというらしい。
「おぉう、中々直球…一応分かってるつもりだったんだが…」
「そうですね、例えば実弾とビームでは速度、範囲、威力、影響等様々に違ってくるのです。」
と、今度は反対側からエメラルド色の、リヴァイヴと比べるとかなり重そうな機体に乗ったルイスが補足説明をする。本日はいつものスターライトにプラスして大きめのシールドを右肩部に搭載していた。
「その辺りは理解しているかと思いますが、一夏様はどうも直感で避けてしまう癖がおありで、総じて動きに無駄が生まれ、また回避先が読みやすくなってしまっているのです。
無論、肉眼では捉えることなどほぼ不可能ですがハイパーセンサーを活用すれば…」
「そうそう。ああ、試しに一度撃ってみる？何か掴めるかも…」
男子サイド、非常に順調なようである。対して、
「一夏…あれほど教えてやったというのに理解していなかったのか…！」

「あんなに楽しそうにしちゃって…！」
「全くですわ…！」
女子サイド、ダークサイドに。妙な連帯感により入り込みにくく、苛立ちが募る一方である。
そうして一夏が初めて銃を手に取り、ちょうど一マガジン分撃ちきったところで、反対側のピットから見慣れぬ機体が出てきた。黒い装甲に大きな実弾砲を備えた威圧感のある機体である。そこかしこから「第三世代…」「ドイツの…」とざわめきが聞こえる。パイロットは『あの』ラウラ・ボーデヴィッヒだった。
「貴様も専用機持ちだそうだな。ちょうどいい。私と戦え。」
「…俺か？嫌だよ、理由がない。」
「貴様には無くとも私にはある。」
「…また今度な。」
「ほう…ならば、戦わざるを得ないようにしてやろう。」
そう言うが早いか左肩部の大型実弾砲が火を噴いた。一直線に、まだ身構えてもいない一夏に砲弾が飛んで行き…
ゴギャァン！
と音をたてて弾かれた。偶々射線の近くに居たからこそ間に合ったルイスのシールドである。
「いきなり砲弾で挨拶なんてドイツの人はビールも頭もホットなんだね？」
なんだか物凄い皮肉を言いつつ、反対側からシャルルが一瞬でライフルを実体化させ、同時に構える。瞬間の早業であった。
「ふん、この私に第二世代型（アンティーク）を差し向けるとはフランスもよほど余裕がないのだな？」
「ご心配どうも。未だ量産化の目途が立たない第三世代型（ルーキー）さん？」
互いに涼しい顔して毒を吐きまくっている。
『そこの生徒！何をしている！学年、クラス、出席番号を言え！』
と、救いの福音であるかのように担当の教師が呼びかける。流石に二度も横やりを入れられては興が削がれたのか、
「…フン、今日は引こう。」

といって去っていった。残されたのは妙な静寂と波乱の予感だった…。

十四話「ファーストコンタクト、カミングアウト」

（それにしても何故あそこまでして一夏様を狙うのでしょうか。）

あの後、余りにラウラが嵐の如く来ては去ったために一同数瞬フリーズしていたが、息を吹き返してからは慌ただしかった。特に一夏はそこかしこから無事かと質問攻めにあい、今も対応中である。そんな中、薄情にも一言二言話してから早々にその場を去ったルイスは一人考えていた。本人に直接聞けばいいじゃない、と。

幸いにもアリーナ担当教員はその涙ぐましいまでの努力により我関せずといった態度のラウラを少しだけ足止めしたようである。すぐに追いつき、

「失礼します、ラウラ・ボーデヴィッヒ様？」

躊躇いもなく呼びかけた。

「…次は貴様か。何の用だ。」

これまた幸運なことに、どうやらしつこい教員に怒りを通り越して辟易としていたようである。話くらいは聞いてもらえそうだ。

「先ほどの件です。ああ、別に責めている訳ではございません。単純に、なぜそうまでして一夏様を狙うのか、と疑問に思いましたので。良ければお聞かせいただけないでしょうか。」

「…貴様には関係ない。話す気もない。…それだけか？」

「そうですか。それは失礼致しました。ええ、これだけです。それでは。」

話してくれると期待していたわけではないのであっさり引き下がり、その場を立ち去ろうとする。と、

「待て、こちらからも質問だ。」

意外にも話を繋げたのはラウラの方だった。

「貴様の機体は何故あの場面で間に合った？いや、間に合っただけならばいい、あの一瞬であそこまで正確に逸らす事が出来たのは何故だ。」

「貴女の狙いが非常に分かりやすかったから、でしょうか。お見受けしたところ展開していた遠距離武装は肩部のカノンのみ。会話内容

から一夏様を狙っているのは明らかでしたので、その砲向からあたりを付けた、という感じです。」
「…ふむ、合格だ。どうやら奇跡的に、ということでは無いらしい。試すようなことをして悪かった。謝罪しよう。」
と素直に頭を下げられた。
「え、ええ。では…」
と言って今度こそ別れる。まともに話が出来たということで収穫はあった。やはり対象は一夏のみらしい。

そのまま夕食を済ませ、部屋に着くと広がっていたのは互いに背を向けて黙り込むルームメイト二人という光景であった。
「お、おお、ルイスお帰り…」
手前、こちらを向いていた制服姿のルームメイトがこちらに気付く。
「…あ!?ル、ルイス!飯まだだろ!?行こうぜ!?」
「い、いえ。済ませてきてしまいましたが…」
「ま、まじか…えーと、えーと…」
と、何やらとてつもなく慌てている。
「い、いいよ一夏。こうなった以上、同室だしバレるのも時間の問題だろうから…」
といって振り向いたのはジャージ姿のもう一人のルームメイト…
…失礼、「によく似た女子」であった。
「…ｏｈ」
ルイス、珍しく絶句である。

十五話「決別」

「まずは、ごめんね。僕はこの通り、三人目の男子なんかじゃないんだ。親にこうしろって言われてね、仕方なく…っていうのはちょっとズルいかな。」

そう言って覇気のない声で悲しげに笑う目の前の女子。

「ん？シャルルの親っていうと、確かデュノア社の…」

「うん、僕の実家のデュノア社、そこの社長である父親からの直接の命令だよ。」

「命令って…父親なら尚更なんでそんな事を…」

「それは…」

そう言って一瞬躊躇うシャルル。隠し切れない苦悩が浮かんでいた。

「一夏、僕はね、妾の子なんだ。父親の不倫相手の子。母親は二年前に亡くなってね。引き取られたんだ。直接会ったのは確か二回くらいかな？あの時は酷かったよ。この泥棒猫の娘が！って本妻の人に怒られちゃってね。僕に言われても困るのにね？」

明らかに無理して笑いながら語られた事実に、一夏は絶句した。流石に十五にもなれば盗んだバイクで走り出す年頃である。妾の子、不倫相手の娘と言われて意味が分からないほど純情ではない。

「それから少しして、僕には高いＩＳ適性があることが分かった。非公式だけどデュノア社のテストパイロットにまでされてね。だけどすぐにデュノア社は経営危機に陥った。第二世代機で完全にシェアは取れたんだけど第三世代機開発が振るわなくて…そこで僕に白羽の矢がたった。どうせ非公式だったから三人目の男子として広告塔にしよう、ってね。」

要するに親に散々こき使われているのがシャルルの現状である。母親が急に亡くなり、茫然としていたところで突然現れた父親に連れていかれ、自分が妾の子だと知ると同時に盛大な罵倒を受け、ようやく取り立てられ、認められたと思ったら急に性転換である。

「…それで、これからどうするので？私達のデータはもう既に大なり

小なり送られたのでしょう？そうなると、心苦しいですが黙って見過ごすことは出来ませんよ。」
　そしてこの追い打ち。自分が黙っていれば大丈夫なのではと考え始めていた一夏、更に絶句。そう、この場には自分のような一般人ではなくきちんと国の代表候補生に所属するルイスがいるのである。流石に即１１０番にはしないだろうが、国のメンツというものもある。
　となると、
「どうって…きっと僕は本国に呼び戻されて良くて牢屋行き、デュノア社は潰れるかどこかの傘下に入るかして消滅、かな。ルイスには本当に申し訳ないけど僕にはどうすることも…」
　話がまずい方向に向かっている、と一夏は感じた。実際その通りである。切り札は先ほど思いついたのだが、それを提案するのはこの状況では虫が良すぎる。
　では、どうするのか。
「…頼む、ルイス！このことはシャルルのことが解決するまで黙ってくれないか！虫が良すぎるってのは分かってる。でも、このまま放っておけないんだ！」
　答えは単純、それでも精いっぱい頼み込む、である。
「い、一夏…？」
「…一夏様、何か策がお有りで？」
　シャルルは一夏の意外な行動に戸惑い、ルイスは落ち着きながらも少し目を見開いている。
「ああ、ＩＳ学園特記事項第二一『本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意がない場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする。』。つまりシャルルが連れ戻されるまでにあと二年と少しは余裕がある。その間に何とか……！」
「…なるほど、時間は稼げるということですね。しかし、言いにくいのですがそれはあまりに不確実では？」
「それはそうだけど…でも！」

「そしてシャルル様、私は貴女が『どうなるか』ではなく『どうしたいか』を聞きたいのです。」
「ぼ、僕は…でも、」
「貴女は人に頼るということに慣れていないのでしょう、しかしここにいる一夏様は貴女を助けたいと本気で考えています。貴方は、どうですか？」
「…ありがとう、一夏。ありがとう、ルイス。僕は…！このままみんなと一緒に過ごしたい！だから、……助けて、ほしい…！」

涙ぐみながらの言葉。二年越しの、押し殺し続けた本音だった。

「シャルル…！ああ！絶対に助けるぞ！
…でも、ルイスは良いのか？いや、頼んだ俺が聞くのもアレなんだが…」
「ええ、私としても、個人として許していないのは、言い方は悪いですが末端のシャルル様でなくフランス国自体です。…幸い一番の証拠であるシャルル様はこちらに居ますし…微力ながら私もお力添えいたしましょう。」
そう言って笑うルイスだったが目だけは笑っていなかった。

その後の顛末を大まかに記しておくと、オルコット家からの情報提供を受けたイギリスがフランスを告発。これによりフランスは欧州連合の『第三次イグニッションプラン』（欧州連合第三世代機開発競争）から蹴落とされ、賠償金、要は世界に対する迷惑料を払わされた。
他にも様々なものを失ったフランスだが、その中にはちゃっかり『被害にあった優秀なＩＳパイロットの保護権』もあった。彼女は今はイギリス国籍であるらしい。
また、一連の流れは全て半年以内に収まるという早期決着だった。

十六話「平穏」

沈黙や平穏というのは、およそ唐突に破られるものである。だからこそ貴重であり、尊いものなのだといえばそうなのかも知れないが、やはり意図せず突然現れる喧騒というのは慣れる方が無理なものである。

コンコン。

「「!?」」

話がまとまり、ようやく一息ついた男子部屋一行の平穏もこうしてノック一つで唐突に破られた。

「一夏さん、いらっしゃいます?まだ夕食を取られていないようですが、具合など悪いのですか?」

「…と、取り敢えずシャルルは隠れろ!」

「一夏さん?入りますわよ?」

ガチャ。特に抵抗もなく開けられる辺りセキュリティはどうなっているのか。…あ、私が閉め忘れていました…とルイス、心の内で後悔。

「…三人とも何していますの?」

「い、いやあ、これは…」

※布団に包まるシャルルと、それに覆いかぶさる男子二人の図

「…シャルル様が少し体調が優れないようでして。こうして二人して看病しておりました。もう大分楽になったとのことですのでお二人でディナーを楽しまれてはいかがですか?ええ、その方がいいでしょう。」

「ゴ、ゴホゴホ!そうだね!行ってらっしゃい一夏!」

「お、おう、そうだな!じゃあそうさせてもらうよ!行こうかセシリア!」

「え、ええ…ですg、はぅ!」

「ごゆっくり、お楽しみくださいませ。」

ガチャン。即席のチームプレイにしては恐ろしく強引な早業であった。途中セシリアが追求しかけたが、一夏に手を握らせ、押し出

した。これでチャラになればいいが。…なるだろう、多分。
「…行った？」
「ええ、もう大丈夫でしょう。」
「よ、良かったぁ…」
　無事乗り切れたようである。
「ありがとう、ルイス。後で一夏にもお礼しなくちゃ…」
「ええ、そうですね。…取り敢えず、お飲み物を用意いたしましょう。」
　そうしてまた始まる平穏。つかの間の休息ともいう。故郷の味ではないが、抹茶というのは心が落ち着くものである。
「…さっきの事もありがとう、ルイス。まだ解決したわけじゃないけど、なんだかすごくスッキリしたよ。」
「それは何よりです。先ほどは少し熱くなってしまいました。お恥ずかしい限りです。」
「そんなことないよ。とても嬉しかった。…でも、どうして？」
「どうして、ですか。…そうですね、昔の自分と重ねていたのかもしれません。私もセシリア様も、少し前までは同じような手合いを相手にしていたので。」
「あっ…そっか。」
　おそらくは資料でオルコット家について知っていたのだろう。気まずそうに顔を伏せる。
「その、ごめん。嫌なこと思い出させちゃったかな。」
「いえいえ、過ぎたことですし気にしなくていいですよ。重要なのはこれから、です。プラス思考でいきましょう。」
「…うん、そうだね。えへへ、なんだかルイスはカウンセラーみたいだね。」
「おや、向いているんでしょうか。これは真剣に検討してもいいかもしれません。」
「ぷっ、なにそれ」
　あはは、と笑う。シャルルに笑顔が戻ったところで、どうやらこの件はようやく落ち着いたようである。

因みにその後、多少疲れた様子の一夏が持ってきた夕食は洋定食の『半熟卵のカルボナーラ』であった。

十七話「噂話と憂さ晴らし」

「…よし。」

放課後、第三アリーナにて。赤と黒に彩られたＩＳ、その操縦者が一人つぶやく。タイミング的に考えてＳＨＲが終わり次第すぐに来たようだ。走ったのだろう。

しかし他の教員に見咎められることもなく到着するという、無駄に良い運が発揮されていた（ここで見つかれば、良くて足止め悪くて織斑先生へ通報である）。その場にいるのは見事に彼女一人。勝ち誇ったような表情である。

「さて、始めましょうか。」

と言って彼女、中国代表候補生にして甲龍専属操縦者、凰鈴音はすぐさま訓練を開始する。普段は一夏と共に行っていた特訓を放り出してまで一人で訓練とは近々の彼女からは考えられない行動であるが、これには朝のちょっとした会話が影響していた。

「そ、それは本当ですの!?」

「う、ウソついてないでしょうね!?」

朝の喧騒は高校という空間には当たり前に存在するもので、まして生徒が九割九分女子のＩＳ学園では普通科よりもそのボリュームは三割増しである。いくらエリートとはいえ、全員がおしとやかな訳ではないようである。

そこにあってなお大きな声。出所は一年一組の教室の一角。人物はイギリス代表候補生と中国代表候補生。話題は…

「ホントだって！学園中この噂で持ちきりなのよ？月末の学年別トーナメントで優勝したら男子三人の誰かと付き合えるって！」

…ということらしい。噂話は加速し、本人たちも知らぬ間に対象を一人増やしつつ学園中に広まっているようである。

「…どうしてこんなことに……！」

言い出しっぺである箒は頭を抱え、

「な、なんだ？何の話だ？」

「さあ？」
当の対象者たちは首を捻るばかりであった。
さて、というような話題を知ってからというもの、鈴もセシリアもそれはそれは張り切り、鈴はこうして誰よりも早くアリーナにスタンバったということである。因みにセシリアは先ほどルイスに捕まっていた。
この第三アリーナには少し特殊なギミックがある。とある一角には射撃訓練用の的が出る装置があり、上空には飛行訓練用のコースラインがあったりと、実に多機能である。今回鈴が使用するのは射撃訓練用のスペースらしい。設定をし、使用開始するところで、
ピピピ！
「っ!?」
警告と同時に回避。横を掠めていく弾丸。発砲元に居たのは漆黒の機体。
機体名『シュバルツェア・レーゲン』。登録操縦者―
「ラウラ・ボーデヴィッヒ……！」
そこには先日一夏を襲った張本人が居た。
「どういうつもり？いきなりぶっ放すなんて良い度胸してるじゃない。」
甲龍を戦闘態勢へとシフトさせつつ、連結式青龍刀『双天牙月』を構える。
「中国の『甲龍』か。…ふん、データで見た時の方がまだ強そうではあったな。」
「何？やるっての？わざわざドイツくんだりからノコノコやってきてボコられたいなんて大したマゾっぷりね？イマドキのジャガイモ農場じゃそんなのが流行ってんの？」
先に仕掛けられたこと、そして続く暴言によりカッとなるがそこは代表候補生、ここで何かやらかしてトーナメント出場停止になどなってはたまったものではない。その怒りの矛先を何とか言葉に変換し吐き出す。

「ハッ。二人掛かりで量産機に負けるような力量しか持たない割にはよく吠える。その程度で代表候補生とは数しか能のない国の人材の質が見えるというものだな？」
「…ふーん、なるほど。要はスクラップがお望みみたいね？誰にも構ってもらえなくて寂しいのかしら？これだから子守りは大変なのよねえ。」
「ッ！」
図星…とまでは行かないまでも何かの琴線に触れたらしく、ラウラは忌々しそうに顔を歪める。心理的優位を取ったかと一瞬思ったが、
「つべこべ言わずさっさと来たらどうだ？もっとも、下らん種馬を取り合うメスに私が負けるなどとは思わんが？」
「…今なんて言った？私には『どうぞ好きなだけ殴ってください』って聞こえたけど？」
この場に居ない想い人まで侮辱され、怒りは頂点に達した。
「とっとと来い。」
「上等！」
そうして始まる、中々見られない代表候補生同士の苛烈な戦い。
小手調べと鈴が衝撃砲『龍咆』を放つ。さりとて強力な砲撃。が、ラウラが前方に手をかざすと何故か無効化された。幾度か繰り返したが、結果は全て同じ。加えてあちらからはレールカノンの弾丸が飛んでくる。埒が明かないと、双天牙月を手にし、距離を詰める。ラウラは変わらず、今度は鈴に向けて手をかざす。
「ッ!?」
まずいと思い、とっさに飛び退こうとしたが遅かった。鈴の全身が何故か硬直し、動かない。
「攻め時を誤ったな？」
「な…！」
目の前にはレールカノンの砲口。わざとらしい程にゆっくりと照準を付けられ、
ゴオオン!!
アリーナ中に爆音が響き渡った。

十八話「私闘（死闘）」

「タッグマッチ？」
「はい、先ほど告知されたようです。…ちょうどそこの掲示板にも。」
放課後。飛び出して行ったセシリアを捕まえてルイスが報告。
「…何故いきなりそのような…ん？」
その時、セシリアの脳裏に電流走る。
（これはつまり…一夏さんとタッグを組むチャンス!?）
「…何を考えているか手に取るように分かりますが一夏さんとタッグを組むことは出来ませんよ。」
「どうしてですの！」
「残念ですが本国より通達が来ております。…このように。」
「な、私のところには…！…来てますわね…。」
まるで見透かしたようなタイミングでイギリス本国からのお便り一枚。おそらく各国には事前にＩＳ学園から連絡が行っていたのだろう。…多分。
正式な文書らしい、長ったらしい文章が延々と連なっているが、要約すると『セシリア・オルコット、及びルイス・ルース両名はＩＳ学園タッグマッチトーナメントにおいてお互いをパートナーとし、相互連携を強化せよ。』とのこと。
「くぅぅ、折角のチャンスでしたのに…！」
忌々しそうに歯噛みするセシリア。そのままたっぷり数分悩んだ後、
「…はぁ。しょうがないですわね。本国からのお達しでは従うのがわたくし達の責務。それに…元々貴方はその為にこちらに来たのですし。」
「お気遣い痛み入ります。」
直前まで『本国からのお達し』の粗を探していた事実からは華麗に目を逸らし、こうして公平性の欠片もない代表候補生同士のペアが生まれた。

「一夏、今日も放課後訓練するよね？」
「おう、もちろんだ。今日使えるのは、確か…」
「第三アリーナだ。」
「「うわっ!?」」
　放課後（三度目）、こちらは慌てる訳でもなく、二人並んで話しながら歩くシャルルと一夏。完全に無防備だったのか、突然現れた箒に大分驚いて素っ頓狂な声を上げる。
「…そんなに驚くほどの事か、失礼だぞ。」
　眉間にしわを寄せる箒。老けるぞ…なんて思っていた一夏の思考を見抜き、更に凄む。こわい。
　箒としては、ただでさえあの日から数日経過し、それなのにその後全くリアクションのない一夏と、周りで囁かれている妙な噂に焦っていた。しかも、本人はそんな思惑を意に介さず（気付けというのも酷な話だが）、男子と仲良く歩いているのである。
「お、おう。すまん。」
「ご、ごめんね。いきなりの事でびっくりしちゃって…」
「あ、いや、別に責めているわけではないが…」
　そんな箒も、折り目正しく頭を下げるシャルルには流石に気勢を削がれた。話題転換の為か、咳ばらいを一つ。ごほん。
「ともかく、だ。第三アリーナへ向かうぞ。今日は使用人数も少ないと聞いている。場所が空いていれば、模擬戦の一つも出来るだろう。」
「おお、それはありがたい。」
　気を取り直し、三人で第三アリーナへと足を向ける。…で、
「箒さんや、今日は空いてるんじゃなかったか…？」
「あ、ああ。そう聞いていたのだが…」
　第三アリーナに向かうにつれ、徐々に人が多くなっていく。流石に全員が訓練に来たわけではないと思うのだが…何やら慌ただしい。騒ぎはまさに第三アリーナで起きているようである。
「一体なんだ…？」
「何かあったのかな。先に観客席から様子を見ておく？」
　確かにピットから入るよりもそちらの方が早い。二人とも頷く。

そこに広がっていた光景は…

「…鈴!?」

―警告　機体ダメージ　大　これ以上の戦闘継続は推奨できません―

「うるさいわねえ、分かってるわよ…」

唇を噛む。先ほどからこちらの攻撃はほとんど相手には通じていない。対して、向こうからの攻撃は恐ろしく正確かつ多角的であり、避けづらい。なるほど、あの自信も分かるというものである。せめてあの手から出ている（？）謎バリアだけでも攻略出来ないものか…。

一方、ラウラも決め手に今一欠けていた。思い出すのは、ＡＩＣに甲龍を捕らえ、至近距離で砲撃を食らわせた瞬間。確かに機体も武装も動かなくなり、確実に大ダメージを与える…予定であった。

忌々しきはあの非固定武装（アンロック・ユニット）。それ自体は動かないが、あれは性質上空気を圧縮して撃ち出すもの。砲身は見えず、角度も無制限。いくらＡＩＣでも、ＩＳと同時にその場の空気全てを静止させることは出来ない。その砲撃でもってレールカノン発射の瞬間にタイミングを合わせて爆発させ、双方にダメージを負わせた。

それからというもの、ラウラは鈴を拘束する際には非固定武装の内部構造まで静止させなければならなくなった。そこまで集中させられては同時に攻撃など出来たものではない。脳の許容限界である。無敵だと思っていた戦法が、たかが小娘（思いきりブーメランｂｙ千冬）である代表候補生に破られるのは相当な屈辱であった。

が、それはそうとしてやはりラウラの実力は圧倒的であった。離れていればレールカノンとワイヤーブレード、近づけばプラズマ手刀とワイヤーブレードと、アリーナ程度の広さではどの距離においても二つ以上の攻撃手段でもって手数で相手を制する戦い。確立された戦闘スタイルであった。対して鈴は、相手の謎バリアに有効な攻撃手段がなく、圧倒されっぱなし。シールドエネルギーなど、とうにレッドラインである。

そして遂に均衡が破れる。ラウラはＡＩＣではなく、ワイヤーブ

レード四本でもって鈴を拘束、残りの二本で非固定武装を貫く。今度こそ、とばかりにレールカノンは腹部にぴったりと、まるで押し付けるように狙いをつける。
「存外長く耐えたな?だが、ここまでだ。」
　朦朧とする意識の中、それでもラウラを睨む鈴。これが直撃すれば、エネルギーが残っていた序盤ならまだしも、機体へのダメージだけでは済まないだろう。ゆっくりと、エネルギーが収束していき…
「やめろおおおおおおお!!」
　遅れて舞い降りるヒーロー。その手に握るバリアー無効化攻撃を可能とする剣でアリーナ内壁を破砕（二度目）し、駆け付けた一夏であった。そのまま切りつけてきたので、咄嗟にラウラは飛び退き、距離を取る。レールカノンはまたしても獲物を捕らえ損ねた様である。
「鈴!大丈夫か!」
「まあまあね…」
　ラウラと対峙し、こちらに背を向けながら尋ねる一夏に対し最低限強がった返答をする。その頼もしい背中に、思わず昔を思い出す。小学生の頃。名前の事で軽く虐められ、諦めて返答せず耐えていた、あの頃。突然間に立ちはだかり、彼らに威勢よく啖呵切っていた少年を。その姿が今、重なって目に映る。ああ、その背中を、
（好きになっちゃったんだなぁ…）
　鈴は安心して意識を手放した。

　気絶した鈴を、一夏が開けた穴から一緒に入ってきたシャルルが端まで運ぶ。
「てめえよくも…!」
「ほう、最近は乱入者が多いな。よほど友達ごっこがお好きと見える。そのお友達が倒れたが、感想はどうだ?」
「ふざけんな!」
　忘れがちだが、ラウラの本懐は一夏を叩き伏せることである。願ったり叶ったりとばかりに一夏を煽る。それに乗って、一夏は瞬時加速（イグニッション・ブースト）。一気に接近する。

「感情的で直線的…ふん。絵に描いたような愚図だな。」
そう吐き捨て、ＡＩＣを起動する。いくら速くても来る場所が分かればそこに網を張るだけである。まもなくもれなく一夏はその結界に捕まる。
「な、なんだ!?くそ、体が…！」
「…フン、やはりこの私とシュバルツェア・レーゲンの前では、貴様も有象無象の一つでしかない。目障りだ、消えろ。」
「一夏っ、離れて！」
レールカノンはまたしても以下略。大量にばら撒かれたシャルルからの銃弾によりラウラはＡＩＣの停止を余儀なくされる。
「ちっ雑魚が…！」
一夏が離れるまで、そして離れた後もシャルルは変わらず銃弾をばら撒き続ける。弾丸を撃ちきっては次の銃、撃ちきっては次へと、とめどなく続ける。
「面白い、ならばこの私が教えてやろう、世代差というものをな！」
そういって身をかがめるラウラ。おそらくあちらも瞬時加速だろう。シャルルは盾に持ち替え、身構えた。シュバルツェア・レーゲンという大質量の弾丸が弾かれるように加速した瞬間…！
「!?くっ！」
ガイィン!!!とラウラが飛び出してきた小柄な黒い影に弾かれ…いや、流され、突如軌道を逸らされた衝撃に思わず足を止める。
「ふう、これだからガキの相手は疲れる。」
「ち、千冬ｎ…うひぃ!?」
「学校では織斑先生だ。」
狙い澄ました様に頭部に真っ直ぐに高速で飛来する出席簿を紙一重で避ける。生身にＩＳ用近接ブレード一本で瞬時加速中の機体を逸らしたり、ＩＳでないと知覚出来ない速さでモノを投げつけたりと、控えめに言ってバケモノである。
「模擬戦をやるのは一向に構わん。だが…それが怪我人やアリーナのシールド破壊に繋がるのであれば、教師として黙認しかねる。決着は学年別トーナメントで付けてもらおうか？」

「…教官がそう仰るなら。」
そう言ってラウラは素直にＩＳを解除する。
「お前たちも、それで構わないな？」
「は、はい！」
「僕もそれで構いません。」
一夏としては言いたいことは色々あったが、ここで辞めた方がいいという賢明な判断三割、凄まれた七割で肯定の返事を返す。
「では、学年別トーナメントまで私闘の一切を禁止する。解散！」
パンッ！と強く手を叩く。その音はやけに大きくアリーナ中に響くのであった。

十九話「それぞれの受難」

「…なんなんですの、あれは」
「…少なくとも今は触れないのが賢明かと」
あの話し合いの後、いくらかの打ち合わせを終えて第三アリーナへと向かったセシリア・ルイスペア。何やら騒がしいが原因は何かとロッカーを足早に過ぎ、ピットに集合、アリーナの方を見てみれば、
傷だらけの鈴と、
立ち去りかけのラウラと、
何やらビビりつつも焦り気味の一夏と、
やや表情の曇ったシャルルと、
「……」
ゴゴゴゴゴ…と覇気を携えつつこちらに歩み出した天下無双のＳＡＭＵＲＡＩが。
「…ああ、お前たちか。聞いていた…訳ではないようだな。追って通達するがこれから暫くはは生徒間の私闘を禁ずる。詳細は奴らに聞け。いいな？」
「ハッ！」
「よろしい。ではな。」
思わず気圧され最敬礼。そのまま見送る。
「…なんなんでしたの、今の。」
「…今後も触れない方が良さそうですね。」
「…はぁ」
何やら短時間でドッと疲れた二人であった。
因みに詳細を聞こうと振り返ればアリーナは蛻の殻であった。一夏たちは逆側のピットから出て行ったらしい。二重苦である。
「……」
保健室のベッドの一角。一夏とシャルルで見舞いに行くと、先ほど起きたらしい鈴はそっぽ向いてむすっとした顔をしていた。
痛々しい傷跡、腕を固定するギプス、全身に巻かれた包帯…なんて

ことは無く、ＩＳスーツのまま、打撲の治療用に腕に少々包帯が巻かれている程度である。

〜

このからくりこそ、今ではすべてのＩＳに備わっている機能の一つ、『絶対防御』である。ＩＳには装甲とは別に、薄く、感知できない、不可視の膜のようなものが全身を覆うように備わっており、操縦者への多大なダメージはそれを通して機体が肩代わりするようになっている。

また、当然のことながらこの機能の発動時は多大なシールドエネルギーを使用するため、ＩＳ同士の試合では如何にこの機能を相手に使用させるかがカギとなる場合が多い。

余談だが、白式の『バリアー無効化攻撃』は相手のＩＳのありとあらゆる「絶対防御の発動を抑えるためのシールド及びバリア」を無効化できる。このため、相手ＩＳは強制的に絶対防御を発動させられる事となり、一気にシールドエネルギーを減らされる事となる。これが零落白夜が一撃必殺を可能とする所以である。

さて、ではシールドエネルギーが底をつけばどうなるのか。答えはさっきまでの鈴に見られるように、『ＩＳ自身が操縦者を強制的に昏倒させる』。といっても無防備に眠ったまま転がされるかというとそういう訳ではない。そもそも事実上シールドエネルギーが底をつくことはない（継続して激しい外部干渉があった場合を除く）。

元々ＩＳには表示上の数値以上のシールドエネルギーが蓄えられている。表示エネルギーが底をついた時、ＩＳは残りのエネルギーで操縦者を守りつつ即座に昏倒させ、自身の機能も絶対防御と操縦者を生かす機能を除いて全てを停止させる。そうすることでエネルギーの自己回復を図り、一定値まで回復したところで（ｏｒ誰かに回収されエネルギーの補充を受けたところで）復旧する。元々宇宙を舞台と想定するＩＳならではの機能である。

〜

「…別に助けてくれなくて良かったのに」
開口一番、この格好にも拘らずこれである。
「お前なぁ…でもまあ、怪我が大したことなくて安心したよ。」
「こ、こんなの怪我の内に入らな…～ッ!!」
強がりながら顔を顰める鈴。
「まあまあ…少し落ち着いた方がいいよ、はい、ウーロン茶。」
「む、ふん！いただくわ！」
態度に反し律義に受け取る鈴。ゴクゴクと音を鳴らしながら飲んでいる辺り相当喉が乾いていたのだろうか。
と、
鈴が置いたコップが振動し始める。…揺れは徐々に強くなっていく。
「な、なんだ、地震ｋ」
バァンッ!!!
「「織斑君！デュノア君！」」
地震かと思ったら何てことはない(？)、多人数の足音だった。突然開かれた扉と突然呼ばれた驚きに硬直していると、一枚のチラシらしきものを目の前に突きつけられる。
それは、学年別個人トーナメントがタッグマッチトーナメントになったことを知らせる貼り紙だった。
「私と組もう！織斑君！」
「一緒に出よう！デュノア君！」
瞬く間に二桁を超える人数からペアの申し込みが。
「え、えっと…みんなごめん！俺はシャルルと組むから諦めてくれ！」
沈黙。そして再起動。
「そっかあ、男子同士じゃあ仕方ないよね～」
「まあそれなら先を越される訳でもないし…」
「寧ろそれはそれで…！」
すぐに散っていく一同。抜群の協調性である。
「あ、ルイスくんなら！」
「それならさっき第三アリーナで見かけた！セシリアと一緒に居るの

を…」
「あっ…（察し）」

さて、大波が突如襲い掛かり、たちまち去った後の保健室では…
鈴が物凄い顔をしていた。見ろよ、あいつの目…（苦虫を噛み）殺した目をしてやがるぜ…！
というのも事前にトーナメントには出られぬ旨が伝えられていたからである。伝えられなくとも意識を刈り取られた時点で薄々自身のＩＳの損傷具合を感じ取っては居たようだが。ままならぬものである。

二十話「嵐の前夜」

「あ、あのね、一夏！」
「ん？」
　鈴への見舞いを無事（？）に済ませ、夕食を済ませ、帰宅後シャルルが口を開いた。
「遅くなったけど…助けてくれてありがとう。」
「あれ、俺何かしたか？寧ろ感謝したいのは俺の方なんだが…」
　一夏にとってはあの謎の結界に捕らえられた瞬間に助けに入ってくれたシャルルはまさに救世主であった。それはもう何がどう作用して窮地に陥ったのか、そして助かったのか分からずじまいであった。
　だがシャルルが言いたいのはそこではなく、
「ううん、そっちじゃなくて、ほら、保健室で。トーナメントのペアを言い出してくれたこと、凄く嬉しかった。」
「ああ、あれか。気にすんなって。事情を知ってるのは俺たちだけだしな。サポートするのは当然だろ？」
　一夏にとってはなんでもないことのようだったが、シャルルにとっては心底ホッとする出来事だった。一応男としての訓練は本国で繰り返してきたし、状況も相まってそうそう簡単にはバレないはずだ。が、やはり事情を理解してくれている人がそばに居てくれるというのは心強いことであった。
「そんなことないよ。それが咄嗟に、自然に出来るのは一夏が優しいからだよ。誰かのために自分から名乗り出る事が出来るのって素敵なことだと思う。僕はすごく嬉しかったよ。」
　そういう訳で本気のシャルルさんの発言であった。一夏、思わず少し照れる。ここまでのセリフを違和感も嫌味もなくスラっと言えるあたり、流石はブロンドの貴公子である。
「ただいま帰りまし…おや、お邪魔でしたか？」
　そうこうしているうちにルイスも帰宅。若干赤面気味の一夏を見て開口一番、少し笑いつつそんなことを言う。

「い、いや!そんなことはないぞ!」
「?」
取り繕う一名とよく分かって居ない一名。状況把握には充分であった。
「申し訳ありません、配慮不足でしたね。少し出ますのであとはごゆっくり…」
「待て待てどういう意味だ!?」
軽快な掛け合いが発生していた。因みに一つ補足しておくと、双方ともに心身に少し負担がかかる事件を目撃しており、疲労度が溜まっている。俗にいう深夜テンションというやつであった。
そんな二人を見つめながら、微笑むシャルル。最初にタッグトーナメントを行う旨が書かれたチラシを一夏が読み上げた瞬間は、この(若干テンションがおかしいが)仲の良い二人がタッグを組んだ時を真っ先に想定して少し憂鬱になった。が、そんなものは杞憂であった。頼り方を教えてくれたルイス、助けてくれた一夏。産まれてこの方、母親からしか感じることが出来なかった「優しさ」というものに触れ、シャルルは胸が熱くなっていた。

二十一話「学年別タッグマッチ」

３年生は今後の指標が、２年生は１年間の研鑽が、１年生は企業からの一時評価が確定する、本日は学年別トーナメント開催日。ある者は不安を抱え、ある者は闘志を燃やし、ある者は自分と向き合う。生徒達が思い思いの過ごし方をする一方、男子達は…

「…なぁ、なんで俺達はトーナメント直前だってのにこんなことしてるんだ？」

「えっと…仕方ないよ、先生方曰く、力仕事は男に任せるもの、らしいし…」

「…これも仕事と割り切って手早く済ませましょう。」

実況席への機材搬入、休憩室への食糧運搬、その他よく分からない荷物をどこからどこへと運ぶ。人はコレを雑用と呼ぶ。

それだけならばまあ愚痴を少々零すのみで済む３人。元々バイトの掛け持ちで鍛えた足を武器にする一夏＋代表候補生２人は伊達ではない。だが、先程から気になる点がもう一つ。

「そうだよな、居心地悪いしな…」

周囲を見渡せば人、人、人。生徒ではない。アリーナ観客席に集った企業のお歴々である。向けられる視線は実に多様であり、大まかに興味と値踏み、そして差別の三種類である。

結局視線は、当然といえば当然だが、最後まで追ってきて、彼らを少し疲弊させた。腑に落ちない３人であった。

「…いいんですか？織斑先生。彼ら、トーナメント始まる前から凄く疲れそうですけど…」

「あぁ、良いんだ。今のうちに慣れた方が、な。」

「それもそうですけど…」

試合開始直前になってこの視線のレーザーに晒されるよりは、今のうちに慣れておいた方がいい。そういう配慮だった。

「ふう、やれやれ。やっと終わったか…」

「さすがに僕もちょっと疲れたよ。」
溜息をつく一夏と、苦笑を零すシャルル。中々絵になる光景である。それはさておき、雑務をしたのは彼らだけではないのだが、やはり視線は1点（3点？）集中。ダイレクトなその目線は、やはり精神に大なり小なり負担を強いるものであった。その手のアレやコレやには多少慣れた代表候補生2人に対し、一夏には少し刺激が強かったようである。
一方こちらは、
「お疲れ様、ルイス。お偉方の視線を釘付けにした気分は如何？」
「ありがとうございます、セシリア様。いやはや、参ったものです。私の帰属先は既に決まっているのですが…」
「仕方ありませんわ、彼らも人材集めに必死ですもの。笑って手でも振っておやりなさいな。」
「これはまた難しいご注文です。…冗談ですよね？」
「期待していますわ。」
結構余裕そうであった。
余談だが、実は彼らは本人達が思っている以上に人の視線というのには強い方である。こちらはもう慣れたものだが、学園中の注目の的である彼らは自室を出れば常に誰かに見られているのである。そんな彼らだからこそ、大会に支障を来すほど疲労しなかったとも言える。

着替えを済ませ、準備を終えた一夏&シャルルペア。充分休憩できたようで、静かに闘志を燃やしていた。
やがて、男子更衣室（今は二人しかいない）の電光掲示板が灯り、学年別タッグトーナメント開催を告げる旨が生徒会長より発言される。
「いよいよか。」
「そうだね。…ふふっ、一夏はボーデヴィッヒさんとの対戦の事しか頭にないみたいだけどね？」
苦笑混じりにシャルルが笑う。考えを読まれた一夏もポリポリと頬を掻き、

「まあな」
と呟く。
結局鈴は出場許可が降りなかった。まだ1年生とはいえ、努力の結果を試すこともできないのは辛いことだ。しかも、彼女は普通の生徒ではなく、国家を背負った代表候補生である。結果を残すどころか出場すらできないというのは、立場を悪くする要因にもなることは明白であった。
自然、拳に力が入る。
「余り感情的にならないでね。彼女は恐らく、1年生の中でもトップクラスの実力者だから…。」
「分かってるさ、ここまで来て負けるんじゃ、かっこ悪いしな?」
そう言って笑う。気合いは充分であった。
生徒会長挨拶を終えた電光掲示板は、やがてペア発表へと進行。先ずは組んでいない生徒達の抽選登録だ。対象者の中にはラウラ・ボーデヴィッヒの字もある。
ピッ、と。画面が切り替わり抽選結果が表示される。そこに表示された名前は…

篠ノ之箒は、女子更衣室にてその模様を見守っていた。こちらは二人しか居ない男子更衣室と違い、女子特有の騒がしさに包まれていた。が、抽選発表のこの瞬間は皆注目する。祈りをこめて、結果を求めて、戦力分析のため…やがて画面は切り替わる。
「…最悪だ…」
目を見開き、信じられない、という表情で呟く。可能性としては、あった。覚悟もしていた。だが、さすがに無いだろうとも、心のどこかでは思っていた。
だが、現実は非常である。
篠ノ之箒の隣。ペアとなった相手の名は、ラウラ・ボーデヴィッヒであった。

二十二話「ツーマンセル」

一夏とあからさまに敵対し、そのことから自身も強く嫌悪しているラウラ・ボーデヴィッヒとペアを組むというのは、篠ノ之箒にとってはとても都合の悪いことであった。即席ペアとはいえ互いにカバーしあい、一夏をはじめとする専用機持ちペアに当たった際も全力でぶつかり、勝利をもぎ取る。そうして優勝したあかつきには…という計画はすべてご破算。一夏との真剣勝負など叶うはずもない。

挙句の果て…発表された対戦表によると一夏たちとあたるのは一試合目。早いにもほどがある。悪いことというのは連鎖するものであるらしい。

「…ふん、手間が省けるというものだな。」

更に加えて、そのラウラはといえば、なんだかものすごく好戦的に笑っていらっしゃる。こちらの事などまるで眼中にない。

「…最悪だ…」

本日二度目の呟きと、深いため息を零すのであった。

その後、なんとか気を持ち直して会話を試みるも、返ってきたのは「邪魔をしなければそれでいい」

そりが合わないことが改めて明らかになった瞬間であった。

そんな一部の生徒の憂鬱などモノともせずに開催されるのが学校行事というものであり、事ここに至っては中止などありえないし、延期などよっぽどのことが無ければされない。

注目すべきは一年生の第一試合。なにせ早くも専用機持ちの登場である。三つのアリーナで三つの学年の試合が同時進行で行われる本大会だが、一試合目から期待の星、国の威信を背負った彼らのお披露目。これを見ない手などない。観客席に若干のバラつきが出るのは仕方のないことであった。

やがてトーナメントの幕が上がる。

一年生第一試合。注目の対戦カード。そこに表示されている、片方のペアは、

セシリア・オルコット、ルイス・ルース　ペア
であった。

唯一（？）の男女のペアという都合上、セシリア、ルイスペアは着替えなどの準備を済ませ、適当な廊下にて集合、そこに設置されたモニターを眺めていた。

「…一試合目、ですわね。」

「ええ…なんとも複雑な気分です。」

出席番号一番の気分を存分に味わっていた。因みに対戦相手は他クラスのペア。当然、専用機などないし、代表候補生でもない。こうなると、相手には悪いが結果は明白であった。

ということで、話し合いは徐々に、どれだけ手の内を見せずに倒すかということになる。加えて、祖国はＩＳ先進国家であるイギリス。負けるなど元より、辛勝すら許されないだろう。手加減はするが、妥協はしない。

…とはいえ。やはり少し申し訳なく思うルイスであった。（この考え方も既に失礼なのは承知の上だが。）

開始の宣言がされ、ピットに居た計十二名の生徒がそれぞれの舞台へと降り立つ。かくして学年別タッグマッチ、ツーマンセルトーナメントの火蓋は切って落とされたのだった。

因みに、この状況で観客席に笑顔で手を振った者は後にも先にも最初の一人だけだったという。

二十三話「エメラルド・ピュープル」

一学年最初の試合。イギリス代表候補生ペアは、来賓客ばかりか教師陣にも注目されている。というのも、ルイスのＩＳは（用途こそ事前に知らされていたが）かなり物珍しいからである。設計思想は分かる、有用性も分かる。だがしかし、それはいわゆる戦力の無駄遣いとも取れるからである。

現れたる「青い雫」。セシリアのブルー・ティアーズと、それに付き従う「エメラルドの瞳」。ルイスのエメラルド・ピュープル。授業中では余り武装を施していなかったが、ここに至っては完全武装済み。その外見はかなりゴツゴツとしていた…

ルイスのＩＳ、「エメラルド・ピュープル」は、かなり特異な立ち位置にあるＩＳであった。そもそも、ＩＳという「兵器」は決戦兵器とも言えるほどの切り札だ。一機一機が一騎当千であり、単騎で戦場を一掃するほどの働きを当然のように求められる。

だが、エメラルド・ピュープルは違う。その用途は『ブルー・ティアーズの完全支援機』。これまで指摘されてきたブルー・ティアーズの問題点、すなわち『ＢＴ適正者の数及び練度』と『実弾兵器がないに等しい』こと。これら二つをカバーするためのＩＳであった。武装は試作量産型スターライトに加え、アサルトライフル一丁、肩部、脚部にミサイルポッド。そしてシールドが二つある。

戦闘の幕が上がる。先に仕掛けるは相手方。打鉄とラファールで組んだ遠近バランスの良いタッグである。打鉄が切り込み、ラファールが火器支援をする。基本を押さえながらもフェイントを交えつつ肉薄してくる打鉄。そのフェイントにしっかり対応しつつ的確な援護をするラファール。彼女らの連携もかなりの高水準で仕上がっていた。

それに対し、ルイスはおもむろにシールドを取り出した。ラウラの砲弾を防いだいつぞやのそれである。独特な四角形の、無骨なそのシールドはラファールからの弾丸を弾く…否、受け流す。その間セシリアは、数歩引きつつラファールに射撃。青いビーム光は的確に腕を

狙っており、ラファールは回避を余儀なくされる。
続いて肉薄してきた打鉄。上段に構えたブレードが振り下ろされるより速く、ルイスは打鉄に近づく。たたらを踏む打鉄だったが、勢いのついた攻撃を止められない。そのまま振り下ろされた刃をシールドの上辺の部分で弾く。直後、ルイスはそのシールドで相手を宙に打ち上げて見せた。
そこに待っていたのはセシリアの正確無比な射撃第二弾。思わぬ方法で空中に上げられ、硬直した打鉄の胴部を数度撃ち抜き、無力化。

後はルイスがシールドで残るラファールの攻撃の尽くを防ぎつつ、セシリアの射撃がシールドエネルギーをすべて削り飛ばした。
この二人は、見事、シールドとスターライトｍｋ．Ⅲだけで相手を圧倒して魅せたのである。その間言葉も交わさず…。
会場は勿論色めきたった。ＩＳ学園に入学するという都合上、ルイスのＩＳのコンセプトは他国にもある程度知れ渡っていた。支援機で、操縦者は男。導き出される推論は言うまでもなく。だがその実、彼は代表候補生であるセシリアの足を引っ張ることもなく、完璧なまでの連携をしてのけた。しかも、シールドのみで。これにはどの団体も評価を改めざるを得なかった。

休まることなく、次も代表候補生出場の試合である。お次は一学年において最も注目される対戦カード。ドイツの代表候補生＆篠ノ之束の妹ｖｓ織斑千冬の弟＆フランスの代表候補生。どこか因縁めいた組み合わせである。
学年別タッグマッチトーナメントはまだ始まったばかりである。

二十四話「スタンドプレーｖｓチームワーク」

「一戦目で当たるとはな。待つ手間が省けたというものだ。」
「そりゃあ何よりだ。こっちも同じ気持ちだぜ。」
ラウラと、一夏。二者は鋭く睨み合い、獰猛に嗤う。それはさながら相見えし竜虎のように…
「「叩きのめす」」
奇しくも同時に同語で宣戦布告し、試合開始とともにぶつかり合う。
「「…」」
約二名をその場に置き去りにして…。

気合十分、開始とともに瞬間加速（イグニッション・ブースト）。点の突きで、あわよくばラウラに一撃を加える算段で飛び出す一夏。しかし当然それを許す相手ではなく、
ＡＩＣによってその動きを封じられる。
ＡＩＣ、アクティブ・イナーシャル・キャンセラー。慣性停止能力ともいわれる兵器。全てのＩＳはＰＩＣ（パッシブ・イナーシャル・キャンセラー）によって浮遊、加速、停止を行っている。ここでいうパッシブ・イナーシャル（ＰＩ）とは、常時掛かる慣性、つまりは重力や慣性そのもので、それらを無効化し、別の力（下記のＡＩ）を発生させることによってＩＳは動いているという訳である。一方、アクティブ・イナーシャル（ＡＩ）とは、そのＩＳが発生させた独自の慣性、つまりは浮遊、加速、停止等の動作の事である。つまりＡＩＣの能力をまとめると
１、ＩＳ自身がＰＩを無効化
２、それが動き出すためのＡＩを無効化するのがＡＩＣ
３、捕らわれたＩＳは自身では何の力も生み出せなくなる
４、結果としてそのＩＳは全く動けなくなる
ということである。ＩＳが機械であることを最大限に活かした罠であり、使用者がそれを解かぬ限りは、ＩＳを脱ぐしか離脱方法はな

い。
　さて、一夏はそんな罠に掛かり、既に抜け出す目はなくなった。開始前の竜虎は一体何処へ行ったのか、そこに居るのは獰猛な蛇と捕らわれた鼠である。因みに、ＩＳを脱ぐなどは危険行為、ひいては棄権行為に等しい。
「開幕直後の先制攻撃、か。相も変わらず分かりやすいことだ。」
「そりゃどうも。以心伝心で何よりだ。」
「ならば私が次に何をするかも理解できるな？」
　既に聞き慣れたといっても過言ではない、ガゴン！という恐怖を煽る大きな音。巨大なリボルバーの回転音が鳴り響き、白式からはしきりに警告音が鳴り響く。
　ここで忘れてはいけないのは、これがタッグマッチだということだ。
「させないよ」
　一夏の後背からシャルルが飛び出し、六一口径アサルトカノン『ガルム』が火を噴く。肩部カノンの砲身に次々と着弾、一夏へと向けられた殺気の塊は空を切る。なおも迫るシャルルの銃弾を受け、煩わし気に後退する。一夏が開放され、チームワークによって一瞬の隙を勝ち取る。この間、
「私を忘れてもらっては困る」
　カバーに入った箒。防御型ＩＳである打鉄の特性を存分に生かし、シャルルの銃弾を防ぎきる。シャルルは現在、近接武装を手にしていない。それを見て取るや、すぐさま距離を詰める。
　が、
「な、なにをする!?」
　そんな箒をワイヤーブレードでキャッチ、踏み台のようにして弾き飛ばしながら、ラウラ、第二ラウンドへと突入。こちらはチームワークの欠片もない。
　過熱していく戦場の中、一夏とシャルルは、アイコンタクトを介して温めていた次の作戦へと駒を進める。
　悟られることなく、密かに、今、この時をもって『箒を先にやっつ

けよう作戦』が発令されたっ…。

二十五話「強者と器用者」

一夏たちの動きが変わった。それは誰もが悟ったことであった。観戦者サイドはもちろん、当の本人たちでさえも分かる程に。当然の事だろうと頷くもの、そう来たかと感心するもの、そして、焦るもの。この場でただ一人焦っているその人物。箒である。

作戦はいたってシンプル。一夏がラウラの気を引いている間に、シャルルが箒を先に仕留めてしまおうというもの。成功すればラウラを二対一という有利状況に巻き込む事が出来る。シャルルは近接特化の箒に対して有利な中距離戦闘型、加えて代表候補生だ。残念だが箒の勝ち目は薄い。突破口はラウラが妨害することだが…そもそも彼女は一夏との戦闘をご所望だ。むしろ喜んで乗ってくるだろう。

そして見事、一夏はラウラの猛攻を耐え抜いた。健闘むなしく敗れた箒に悪いと思いながらも、即座に一夏のもとへ駆けつけるシャルル。見事なスイッチングで後退した一夏。乱れた呼吸を整え、再び戦線に加わった。

「一夏さんたちの作戦はうまくいったようですわね。」
「ええ、そのようです。篠ノ之様も善戦したのですが…」
「お友達、という立場からは少々心苦しいですわね…」
まったく、と肩をすくめるセシリア・オルコット。まったくです、と苦笑するルイス。二人とも前試合から直後の試合のため、アリーナ控室にてモニターを眺め、観戦していた。
「いずれにしても、」
「ここからがスタートライン、ですわね。」

状況は二対一、シールドエネルギーは、余裕とは言えないがまだある。加えて、
「よし、行くぞ！」
「うん、勝とう一夏！」
頼れる仲間がいる。

「よし、決めるぞ！」
零落白夜。剣に宿され、零落してなお輝く、沈まぬ太陽の輝き。一撃必殺の刃で突撃する。
「触れればシールドエネルギーを消し去るらしいが…ならば当たらなければいい」
いうやいなやＡＩＣによる捕縛網が一斉に飛んでくる。不可視のそれを、ラウラの視線、一挙一頭足から予測しつつ避ける。急停止、転身、急加速。難しい姿勢制御をこなしていく。地道な特訓の賜物であった。
「ちっ…小癪な真似を！」
「一夏！前方二時の方向に離脱！」
焦れてきたラウラが、停止結界に加えてワイヤーブレードを射出。不利を悟ったシャルルから声が飛ぶ。自分の攻防に意識を傾けつつ一夏の援護をする。二対一でなお互角なラウラもだが、それに並ぶほどの優秀さである。
やがて、一夏はついにラウラを射程に捕らえる。
だが、
一夏が近づくほどラウラからも捉えやすくなる訳で、
瞬間、一夏の全身が硬直する。逃げ回る蝶を網に入れたがごとく。
ラウラの表情が歪む。
…しかしその歪みは、喜悦ではなかった。
「知らなかったか？これはタッグマッチだ！」
ＡＩＣには弱点が一つ存在する。それは、対象に意識を最大限まで傾けなければならないことだ。一夏を捕らえたラウラの意識は全てそこに注がれた。その隙を突き、肉薄する影。言わずもがな、シャルルである。正確なショットガンの六連射が大口径レールガンを粉砕する。
「一夏！」
「おう！」
開放された一夏が零落白夜を構えなおし、必殺の、勝利を確信した一撃を放つ。

ラウラの顔が初めて驚愕に染まり…

…ここで一つ注意しなければならないことがある。一夏はこの攻防の間、常時零落白夜を発動させていた。シールドエネルギーが万全ならば何も問題は無かった。が、それは…

キュゥゥゥゥ…ン

「なっ、ここで!?」

零落白夜はラウラのシールドを浅く切り裂き…そこで力尽きた。

「限界までシールドエネルギーを消耗してはもはや戦えまい！」

一転、反撃に出たラウラのワイヤーブレードを必死に弾く。

「させないよ！」

「邪魔をするな！」

ここぞとばかりにその高い技量でもって二人を同時に圧倒する。

「ぐっ」

「シャルル！」

被弾したシャルルに気を取られた一瞬。

「これで終わりだ！」

一夏を一夏を蹴り飛ばし、ワイヤーブレードで止めを刺そうとする。

「まだ！」

「な…!? 瞬時加速（イグニッション・ブースト）だと!?」

これぞシャルルの奥の奥の手…という訳ではなく。どうやらこの戦いで覚えたらしい。器用さもここに極まれり、である。

慌ててシャルルに対処するためＡＩＣを発動しようとする一瞬、今度は一夏の、正真正銘、奥の奥の手が発動。シャルルがわざと残談を残してばら撒いておいたアサルトライフルを拾い上げ、発砲。ここでも特訓が生きた形である。シャルルがどんどん肉薄していき…

「…驚きましたわ、シャルルさん…いつの間に瞬時加速をお覚えに？」

「分かりませんが、この短期間で習得されたのでしょうか…だとしたら驚くべきことですが。それとも前から使えたものをお隠しに…？」

後にこの戦闘で覚えたと聞いた時、彼らは腰を抜かすことだろう。それほど規格外なのだ。未完成とはいえ、一国の代表を剣一本で世界最強に君臨させる立役者を習得するというのはそれだけ難しいことなのである。

「なにはともあれ…勝ちましたわね、一夏さん」

「そのようです。ツーマンセルであることを見事に活かした勝利ですね。」

第二世代最強威力にして最低命中率を誇るパイルバンカー『盾殺し（シールド・ピアース）』。それがシャルルのＩＳ『ラファール・リヴァイブ』に搭載されていることを彼らはデータ上で知っている。不意を突いた瞬時加速からの、不意を突いた盾殺し…決まれば確殺であろう。そして今決まった。

異変はここから始まる。

「な…!?なんですの、あれは!?」

突如、負けたラウラが黒い物体に覆われ、旧式ＩＳを纏った女性を形取っていく。

「まさか…」

「あれは、まるで…」

誰もが知る、そのシルエット。ＩＳ操縦者ならば一度といわず幾度も見る、その威容。世界最強の座に一時君臨していたその姿は…

黒い全身に、黒い眼。その黒曜の瞳に、何故かモニター越しに捉えられたような感覚を、ルイスは感じた…。

二十六話「二度目の秀撃」

部門受賞者模倣（ヴァルキリートレース）システム。略してＶＴシステムと呼ばれるそれは、読んで字のごとく。第一代世界最強、そのずば抜けた実力から世界最強（ブリュンヒルデ）とも呼ばれる人物の技術や身体能力を模倣し、使用者に強いるシステムである。

現在は国際ＩＳ条約によってどの国家、組織、企業においても研究、開発、使用すべてが禁止されている。表向きには、その通常とはかけ離れた動きによる使用者への大きすぎる負担を鑑みて倫理的に。裏にある真の意図としては使用者という代価に引き換えて余りあるその戦闘力の独占と量産を抑止する目的から。

その禁忌の塊は。使用者であるラウラ・ボーデヴィッヒを依り代として顕現した戦闘マシーンは。

「…」

モニターに繋がる一つのカメラを凝視していた。誰もが唖然とし、やがて事情を理解した学園側が一足遅れて異常に気付き、避難誘導を開始する。

やがて、それはカメラから視線を切る。と、同時にいつぞやの時のように隔壁が次々に閉じる。

――それは、この上なく完璧なタイミング。避難を開始していた生徒たちは次々と廊下を隔離していく隔壁の内外に閉じ込められ、それによって教員たちは手荒な手段で強行突破する事が出来なくなった。その中には当然、前回教員たちと力を合わせてハッキングに対するハッキング作戦を実行した技術科の三年生たちの一部も含まれている。学園側は前回よりも周到な相手に前回よりも少ない人数での抵抗を余儀なくされた。

そんな危機的状況に直面した彼女らは、それでも震える唇を噛みしめ、前回のように逆ハッキングを敢行する。その指の一本一本に学園の安全と、アリーナに取り残された一年生たちの安否が掛かっていることを理解している故に。

そして、彼女らは気付く。

「…ん？ここって…」
彼女たちの端末には、閉じられ、ハッキングされた隔壁は全て赤く表示されている。…否、たった一つを除いて赤く表示されている。
「そこって…まさか…!?」
感づいてしまった山田先生の顔が青ざめる。同時に悟った千冬は苦虫を噛み潰したような表情で腕を組む。
そこは、アリーナと待機室を繋げるゲート。…たった今まで、セシリア・ルイスペアが休憩していたエリアであった。

「あれは、まるで…」
「…かなり危険ですね。もし仮にアレが完成されたＶＴだとすると、我々総掛かりでも相手になるかどうか。」
「…では、取り敢えず尻尾巻いて助けを呼びにでも行きます？」
「…いえ、まさか。出口の隔壁は封鎖されていますし、この場に彼らだけを残していく方が愚策でしょう。友人としても、将来の主候補としても、ここは自分を売っておきたいところですね。セシリア様はここでお待ちになりますか？」
「それこそまさか、ですわ。貴方の将来の就職先を決めるためにも、そしてわたくし自身の身を固めるためにもアピールは必須ですし。」
「それは大事な御用です。しっかりその機会を設けるためにも、参りましょう。」
などと、この場においてまで軽口をたたき合う二人。通常、彼らならば。知にも長けた彼女らならばここはおとなしく撤退を最優先にしただろう。自分たちの価値を知っている。そして、退路を断たれ進路を残された、あからさまな罠だと理解している。しかし今回は。そして恐らくこれから待ち受ける苦難の先には、待ち受ける友人が、想い人が居るのだ。これを無視しては、それこそ自分の価値など薄れゆく。
これを彼らは、古めかしく輝く誇り、「ｎｏｂｌｅｓｓｅ（高貴な者の持つ義務）ｏｂｌｉｇｅ」と呼ぶ。

二十七話「不意打ちは鋭く」

ゲートを抜けると、そこは死地だった。

「!?」

その手に大きなシールドを構え、主人を守るようにして飛び出たルイスを待っていたのは刃の洗礼だった。ステージ（と言っても観客席は隔壁により満席だが）に舞台入りした瞬間、その黒いＩＳは弾丸のようにルイスに迫ってきた。それまで相手をしていた一夏をガン無視して。

その後も嵐のように繰り出される剣技の数々に防戦一方のルイス。それは正しく豹変と呼ぶにふさわしいものだった。なにせその直前までは、激昂しシールドエネルギーが底を付きかけている状態でなお突っ込んだ白式とそのサポートのシャルルを相手にしていたのだ。まるで確かめるように、傷ついた白式でも対応できる範囲に抑えた攻撃で。ところが今はまるで容赦がない。全盛期の千冬程ではないが、それでもそれは一高校生の対応できる範疇を遥かに超えていた。

「やろう…ふざけんな！」

「ダメだよ一夏！その機体じゃ！」

「離せよ！あれは！あいつは…！」

その後一夏から語られる話によると、やはりあれは千冬を模倣するＶＴシステムであるようだ。もっとも、姿形からしてＩＳ教育中に幾度となく見るビデオ映像の中の人物、暮桜に乗る千冬そのままであるため見当はついていたが。

…そんな話をしている間も、暮桜（仮）はルイスに対して猛攻を続ける。それは不自然なまでに。しつこく。一時離脱している一夏とシャルルに代わる形で援護しているセシリアのこともまるで眼中にないらしい。

取り敢えず一夏の方は、シールドエネルギーを一夏ほどは消耗して

いないシャルルのラファール・リヴァイブ・カスタムⅡから工面することにより賄うということで決まったらしい。普通ならばどちらかに集中させ、一夏ならば一撃必殺、シャルルなら多撃確殺でいきたいところである。どちらもルイス・セシリアペアの援護があればこそ、現実味を帯びてくる作戦である。しかし敢えてそうしないのは、この状況が普通ではないからだ。というのも、

「よく聞いて一夏、あの敵は普通じゃないよ。まずあれが模倣してるのは織斑先生でしょ？」

「そうだ、あいつ千冬姉の真似を…！」

「そう、確かにそうなんだよ。でも、あれが模倣してるのは正確にいうと織斑先生じゃなく、モンド・グロッソの織斑千冬なんだよ。」

シャルルの視線の先には未だにしつこくルイスを狙い続ける暮桜（仮）。セシリアの援護攻撃を所々避けつつも、気にする素振りは一切ない。ましてや一瞬でもそちらを見ようともしない。

「モンド・グロッソには色々な競技部門があるけれど、織斑先生が出場したのは近接戦闘部門のみ。つまり、あれは一対一の技能しか模倣出来ていないんだ。さっき一夏を狙っていた時も、僕の射撃は要所を狙ったもののみ回避された。今も多分…」

そう言ってアサルトライフル、ガルムの銃撃を関節を狙って撃ち込む。回避される。しかしやはりこちらを気にすることはなくルイスを狙い続ける。

「こんな感じで、一対一じゃないと対応できないんだ。つまるところ、そこに隙がある。」

「…なるほど、要はルイスが相手をしている間にシャルルとセシリアで隙を作り、そこに俺が零落白夜を打ち込むってわけか。」

相手の分析をし、作戦を立て、そうしているうちに冷静さを取り戻した一夏。しかし一方で、そのあまりの劣化コピー具合に闘志を燃やす。決着は近づいていた。

「ぐっ…!?ですが、これなら…！」

大型のシールド二つによって暮桜（仮）の猛攻を防ぐルイス。その

額には汗が浮かぶ。が、事態はそれほど深刻ではなかった。
アリーナに入った瞬間にこちらを向き、唐突に襲ってきた暮桜モドキは、今も執拗にルイスを狙い続けている。しかし彼に言わせれば、それはとても好都合だったと言える。
彼のＩＳ『エメラルド・ピュープル』は、元々打鉄のような防御型である。全身の厚い装甲に加え、大型のシールドを二つ搭載した本機の役割は、本来は射撃特化型ＩＳの補助、つまりは『ブルー・ティアーズ』とのセット運用である。当然、守備範囲（字の通り）は近接から遠距離、実弾からビーム、果ては肉弾戦までと多岐にわたる。そしてルイスも、彼自身の専用機となる機体の特性上それなりの訓練を積んでおり、こと守りに関して言えば少なくとも一学年において彼の右に出るものはいない。
そう言う都合で、自陣が整うまで彼は時間を稼げばよかった。相手は世界最強（ブリュンヒルデ）ではなく、その劣化コピー。一撃一撃は鋭く重いが、その全てはパターン化されており、本当に危ない一撃はすかさずセシリアの援護が入る。これが英国最新の布陣だった。そして彼らは、倒しきるとはいかないまでも値千金の時間を見事に稼ぎきる。やがて、シャルルと一夏がついに合流することとなる。

まず、シャルルが合流することによってルイスの負担は更に軽減する。セシリア一人の援護でさえ致命の一撃を抑えることに成功していたのに加え、もう一人加わることによって暮桜（仮）の勢いは更に弱くなる。それでもなお、ルイスを狙い続ける。
『こちらの準備整いましてよ。』
『こっちも行けるよ。』
『トリは任せろ！』
セシリア、シャルル、一夏の順に声がかかる。後は事前の打ち合わせ通り、ルイスがトリガーとなる行動を起こせば詰めの一手が始まる。カウントダウンは始まった。
横の薙ぎ払い…違う。袈裟懸けの攻撃…違う。返す刃…違う。そして縦の一閃…今！

「行きます！」
気合一声、ルイスはその両手のシールドを即座に量子化、格納し、素手になる。
ＩＳ発祥の地、日本において遥か昔に確立された新陰流と言われる剣術の流派、そこに伝わる技能の一つに無刀取りと言われるものがある。似たものに真剣白刃取りがあるが、それとは違い、こちらは振り下ろす前に相手側へ一歩踏み込み、勢いがつく前にそれを止めるというものである。
ルイスが実行したのはその無刀取りのアレンジで、相手側に踏み込んでその得物の持ち手を掴むというものだった。これには流石に暮桜（仮）も動きを一瞬止める。
後ろから一夏が近づく。その手には雪片弐型。
変わらずルイスの方を向きながらも回避しようとするが、得物ごと腕を掴まれたため身動きが取りにくい。
そして、それ以上の動きを封じるようにシャルル＆セシリアの関節等弱点を狙った狙撃。相手がこちらを見ず、動きを止めているともなれば外す要素は無かった。
「行くぜ偽物野郎！これで…終わりだあああああ！」
白式の振り下ろした雪片弐型が暮桜（仮）に突き立った瞬間、一夏は零落白夜を発動させる。発動可能時間は一瞬。されどその輝く刃は、確実に絶対防御を発動させ、残りシールドエネルギーを余さず喰い尽くす。こうして決着はついた。
「ぎ、ギ…ガ……」
解除されていくＶＴシステム。眼帯が外れ、金色の瞳を露わにしたラウラの顔が出てくる。まるで捨てられた子犬のように、ひどく不安そうなその目に害意など欠片も見えず。
だからこそ、油断していた。
「ッガ…!?」

最後まで解除されなかった右腕。黒く染まった雪片は思わず力を抜いた一瞬の隙を突いて。
ルイスを袈裟斬りにした。

二十八話「幸運の反動」

声が聞こえる。
荒々しい男性の声と、弱々しい女性の声。何やら言い争っている。混濁し、かすれた意識の中で必死に耳を傾ける。
「…だよ…ったん…よ…！」
「…か…ない。…」
「…！〝ルイス〟は…！」
酷くノイズが走るのは自分が意識を手放す寸前だからだろうか。それとも、この『なにか壁を一枚隔てて聞き耳を立てているような違和感』のせいだろうか。微かに自分の名前を聞き取ったくらいしか分からなかった。ダメージを負っているというのに、妙に冷静な思考をする。
いずれにせよ、自分の為に彼らは言い争っているらしい。記憶も定かではないが、唐突に自分が心配と迷惑をかけたような気がする。そう感じたのなら行動に移すべきだ。アパートの隣の部屋に声をかけるような心持ちで彼らに伝える。自分は大丈夫だ、心配するな、と。
「…!?…、…!?」
「…、…。」
既にほとんど聞き取れなくなっていたが、どうやらなんとか、彼らに伝わったようだ。その一事に安堵し、彼は意識を手放した。傍らに何かが寄り添うような、優しい気配を感じた。

暫くして、穏やかな浮遊感と共に目を覚ます。まず視界に飛び込んできたのは白い天井。一拍おいて莫大な情報量を伝えてくる視覚を一度シャットダウンし、柔らかなベッドに身を任せ、一呼吸おいて思考する。脱力感と倦怠感で体を動かす気にはならなかった。
どうやらここは医務室のようだ。自然な流れでかんがえるならば恐らくＩＳ学園の保健室だろう。そこいらの一流大学病院にも引けを取らない、最先端の保健室である。…もはや「保健室」の定義を見失いかけているが。

簡単な状況確認の次に行うは記憶整理。
（たしか…斬られてしまったのでしたね…）
ラウラ・ボーデヴィッヒ駆るシュバルツェア・レーゲンに埋め込まれ、覚醒してしまったＶＴ（ヴァルキリー・トレース）システムからの、不意の一撃。戦闘終了直後という間隙を突いただまし討ち。完全に気を抜いてしまっていた。主をおいて盾が油断するなどあってはならないことだ。アレは完全に自分を狙っていたから良いようなものの、一歩間違えていれば先にやられていたのは自分以外の誰かだったかもしれないと思うとゾッとする。
しかし気になるのはその部分だ。〝なぜルイスのみがあれほど執拗に狙われたのか〟。一人を狙い続けるプログラムだったならば一夏でないことの説明がつかず、ランダムロックで偶然にルイスが狙われ続けていたとは考えにくい。
つまり、〝ルイスはあのＶＴシステムに完全に狙われるように人為的に仕組まれていた〟と考えるのが妥当だろう。
一体何処の誰による行いなのか。後にルイスも知ることとなるが、事件が起きた日の夜。一夜にしてドイツのとあるＩＳ工廠が壊滅した。実行犯は、後に自ら声明を出した篠ノ之束。曰く、勝手にお粗末な実験をするのは構わないけど、それで箒ちゃんやいっくんに危害が及ぶようなら即刻始末しちゃうからね、らしい。当事者からして、これほど恐ろしいことはなく、また喜ばしいこともないだろう。要するに、その特定の二人に危害が及ばなければ何をしても構わないとも解釈できるからだ。
最後に日時の確認。簡易机の上に置いてあるデジタル式の時計を見る。
（事件当日より三日ほどですか…予想より随分と早く済んだようです。）
どうやら事件から三日後の正午のようだ。見積もりでは五日ほどかかると思っていたが、どうやら傷は浅めで済んでいたようだ。これでひとまず安心できる、ということになる。
（それにしても…）

意識した途端、猛烈に主張してくるのは胃袋。栄養剤の点滴などはされており、命に係わる空腹ではないのだが、そこは舐められない三大欲求が一。わざわざナースコールを使用するには踏み切れず、見回りが来るまでしばらくの間、一人悶々としているのだった。

時は戻って事件翌日朝。ホームルームの時間だが、教室には三名の生徒が不在である。ルイス・ルースは負傷中。ラウラ・ボーデヴィッヒも同じく負傷中だろう。そして、理由は分からないがシャルル・デュノアも居ない。昨日の大浴場に入れなかったことをやはり恨んでいるのでは?と、ありえない想像をつらつらと考えながら織斑一夏は座っていた。

そう、昨日は一夏にとって素晴らしい日だった。トーナメント後、簡単な事情聴取を教師陣から受け、遅めの夕食を取っていた時にもたらされた素敵なニュース。運んできてくれた山田先生によると、その日は大浴場のボイラー点検で生徒たちの入浴は禁止されていた。が、その作業は終わり、空き時間ができたので折角なら試験的に男子専用の日ということにしてみようとなったという。久方ぶりの温泉。根っからの（時々爺臭い所が出るほどの）日本人である一夏は、シャルルからの

「ぼくは遠慮するよ、脱衣所で時間をつぶして、頃合いを見て部屋に戻るよ。」

という天使のような慈悲に後押しされ、貸切風呂を満喫した。一時間ほど、のぼせる直前まで堪能してから帰ると、シャルルは居なかった。職員室にてまだ話すことがあった旨を記した書き置きがあったので特に心配もせず、心地よい疲労感に誘われるがまま眠りについた。

そして朝、朝食を取り終わったあと、シャルルに先に行ってていいと言われ、教室について今に至る。

まもなくして、副担任たる山田真耶先生が入ってくる。（ここで昨日はありがとうございました、と心の中で感謝を捧げる一夏。）少しお疲れ気味の彼女が、ややあって口を開いた。

「えー、今日は…今日も?転校生を紹介します。といっても、既に紹介済みというか…そのぉ…。じゃあ、入ってきてください。」
「失礼します。」
　現れたのはどう見ても既視感のあるブロンド貴公子（元）。
「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めてよろしくお願いします。」
　さわやかに微笑みながら一礼。とても様になっている。どこかのお姫様のようだ。
　…そう。お姫様のようなのである。
「えー、デュノア君はデュノアさんでした、ということです。…はあ、また部屋割りの組みなおし作業がはじまります…」
　どうやら山田先生が疲れていた理由はそれらしい。
「え…デュノア君、女の子?」
「おかしいと思った!美少年じゃなく美少女だったわけね。」
「あれ?織斑君、同室だったよね?」
「しかも昨日って確か男子たちが大浴場使ったわよね!?」
　これは非常にマズイ予感!思ったと同時に一夏、逃走開始。
「一夏ぁっ!!!」
　バシーン!と蹴破るような勢いで開かれた教室の扉の先には、ハンター…!
「どこへ行く、一夏…」
　まわりこまれた　!
「説明を要求しますわ…事と次第によっては…」
　モンスターハウス　だ　!
「は、はは、ははは…」
　人は極限を超えると笑うしかなくなる、とは誰の言葉だったか。そもそも笑うという行為は威嚇の派生であり…などと現実逃避をしつつ。一夏は己の命を繋ぐため、窓から飛び出して逃走劇を開始するのであった。